

宗教における基礎的思惟研究 (二)

植田重雄

はじめに

原始、古代、中世、現代を問わず、すべての民族、すべての文化においてもっとも深い関わりを持ち、思索を深め、限りなく美を感じさせるものは光である。人間の意識の根底において神性を感じ取ったものに、すでに述べたように、太陽あり、月あり、星辰あり、これをまとめて光とか、光明とか名づけている。電光、落雷、火山の噴火、岩石や樹木などから発火する火も当然神聖視されてきた。人類が火の存在を知り、火とその光を積極的に使用する歴史がそのまゝ人間の文化となっている。さきの論稿で天や太陽神について考察して来たのであるが、さらに触れるべき宗教的主題は多いのでここでいくつかの問題を考えてみたい。まず宗教的な天体の主題でいうと、「光と闇の転換」にともなう「光の誕生」、「ユル」、「ゲルマンの冬の習俗」さらに「蠟燭」、「火の習俗」など生活にまつわる光の行事などについての宗教的思惟の展開を取り上げてみることにする。

光と闇の転換の習俗

光と闇の転換は夜から朝を迎え、夕から夜に変わる日々の現象に体験される。年間を通じては冬至、夏至は注目すべき一大転換点である。とくに冬至の日を基点としてその前後の二週間位を冬至期と呼んでもよい程に、宗教的にはさまざまな祭や行事が集中している。キリスト教ではクリスマスとその準備段階や以後の民俗的行事を含めてクリスマス期と呼ぶ。これを復活祭期と対比し、冬至にたいする夏至、冬季と夏季の二季の転換で一年の生活を見ることが出来る。同じ転換点でありながら、冬至よりも夏至は余り重要視されないのは、夏至のさ中は豊かな光と熱に恵まれていて、農作物その他すべて成熟期にあるためである。これに比べて冬至は寒さが厳しく、太陽の光の乏しい時期であり、つぎの年の農耕牧畜への待望をかけているために一層重要性を増してきたと思われる。

一年間の中でもっとも昼が短かく、夜の長い冬至の日は、この日を極点として再び太陽の日照時間が延びる日であることを人間は発見した。

この光の誕生は宗教にとってもっとも神聖な出来事であり、昔から現代に至るまで、世界の多くの宗教や文化が関心を寄せてきた。光と闇の問題はその由来するところ、けっして単純な内容ではない。ここでは主としてキリスト教における習俗とゲルマン（ノルマン）に遡っていくつかの習俗に焦点をあてて考察することにしたい。

クリスマス

民間信仰によれば、クリスマスの深夜、鐘が鳴り出すと、「この世界には閉ざされている死者の世界がわずかに見え、山に埋もれている宝石が輝き出し、湖に沈んだ鐘の音がきこえ、昔栄えて亡んだ海底の城や町が仄かに浮び

上り、雪の中に春が生まれ、リンゴの木は一時間のうちに、蕾をつけ花を咲かせ、実を結び、太陽は真夜中に三度、喜びの舞いを舞い、罪（汚れ）なき人々には動物の話している言葉がわかるようになる」といい伝えている。

一瞬のうちに奇跡のような出来事を人間は思い浮べるのである。クリスマスとはまさに「聖なる夜」であり、「聖なる転換」が成される時なのである。現在われわれはクリスマスといえば、クリスマスツリーにさまざまな飾りものを吊り下げ、豆電球や蝋燭を点して、美味しいケーキや特別な御馳走を食べて楽しむきわめて家庭的な祭の状態を想像しがちである。しかし「聖夜」と呼んでいる言葉の背景には、もつとそれ以前に遡れば、クリスマスそのものの成り立ちにも及ぶ宗教的文化的意味があつたはずである。そのことについて少しく触れてゆきたいと思う。夜がもつとも長く昼がもつとも短かい冬至の日は、同時に昼が長くなる出発点として古くから尊重されてきた。この地上の世界にリズムがあるように、宇宙にもドラマがあり、大きなリズムがある。それは新しい太陽の誕生、光の再生である。これは新しい年の始まりでもある。スカンジナビアの諸民族はこの冬至の頃を「ユル」(三)の祭と称して、野原や丘の上でさかんに火を焚いて、太陽の誕生を願い、その到来を祝ってきた。「ユル」の語源については残念ながらまだ確定していないが(これについては後述する)、長い間キリスト教のクリスマスのことを「ユルの祭」と呼んで来ているのは、クリスマスとユルがきわめて似ており、相共通するものが感じられたからであろう。

チューリングン州のシュヴァイナ(Schweina)の近くにあるアントニウスベルゲ(Antoniusberge)ではクリスマスの夜に、いわゆる「クリスマスの火」を焚く習俗がある。待降節アドベントの時期に村の若者たちはこの山の頂きに石積みをし、苔、芝草、藁を重ね、柱とする樹木を建て薪を塔のように組み上げ、しっかり結びつけておく。十二月二十四日の夜更け、ふもとから少年たちが登って来るとき、火を放ち、大きな火柱となって燃え上り、少年たちはこの

火をうつし、たい松を振って歓声をあげる。火柱が闇の空に燃えつきると、たい松を振りながら下へ降りてゆき、村に帰り、教会のミサに参加する。このように火を焚くことによって、新しい光の誕生を祝う習俗があったことを示すものである。アイスフェルデン (Eisfelden) では、昔はクリスマスの夜に行っていたこの火柱を上げる行事が、新年明けて「三王礼拝」(一月六日) になったところもある。火柱の焰を見ながら、讃美歌を歌い、そのあとで「ホレ (Holla) が燃えたぞ」と子供たちは口々に叫ぶ。ホレはかつてはゲルマンの女神であり、災いを下す精霊あるいは魔女である。悪霊、災いを燃やしたことを意味する。

スウェーデンではユルブロック (Julblock) と称して、同じように薪や材木を積み上げて燃やす習俗がある。これらはすべて冬至の燃やす火の習俗である。クリスマス期の火の習俗は、とりどりにあるが、この冬至の火が全ての基本であり、原点であるとわたしは思っている。雪が降り、風が吹き荒れる野原や山の上でなぜ火を焚くのであるか。習俗という行為は、祈りや瞑想、讃歌や舞踏と密接につながりを持ちながら、他方ちがった独特の宗教的内容を保っている。

古い記録によれば、ゲルマン人は冬至の日に、さかんに火を焚き、鹿や牛などの皮をかぶってそのまわりで乱舞したと伝えている。火を焚くことは、収穫の感謝をし、ゲルマンの神々にたいし牛、馬、豚などを屠って犠牲にさげた。あるいは来るべきつぎの年の農耕の豊饒を祈り、犠牲をさげたらしい。火を燃やすことは、人間特有の行為であるとするれば、真冬の夜空を焦す焰の明りは、そのまま人間の息づかいであり、生の悲願であり、人間存在そのものの証しであるかもしれない。また火をヴォーダンやフライアの神々に捧げることによって、明るく暖かい季節への希望を祈り、天の火である太陽にたいする再生を願ったのであった。習俗はこれらすべての願いを包含する表現である。

ヨーロッパのキリスト教のクリスマスは、この冬至の現象に大いにこだわる。東方教会の定めた一月六日のクリスマスをやめて、十二月二十五日に行くことにしたのは、旧い暦ではこの日が冬至の日であつたからである。この日こそ信仰の太陽であるキリスト・イエスの誕生を祝うのにもっとも適わしいと考えたからである。東方教会の伝承では洞窟の比喩によつて強調されているごとく、キリストはこの世界の闇の中に生まれたのであり、二世紀のヤコブ原福音書もキリストの誕生は洞窟であつたと伝えてゐる。十二月二十五日の冬至の日、もっとも長く夜の闇がつづくこの日こそ救いの太陽、救いの光であるキリストの誕生にふさわしいと確信した。ヒエロニムスはつぎのように説教している。「宇宙はわれらの言葉^{ロゴス}の証しである。この日まで暗い日々が増えるが、この日から闇はなくなる。光が力を増し、夜が弱まる。昼が明るくなり、誤りが消え、真理が昇るのである。…」と説教している。このような観点から冬至は救いの光の象徴となる。

古代から光は非質料的現象として、神の霊の象徴である。神は光であり、闇は彼の中にないとヨハネ福音書（一ノ五）で述べており、光のみが色彩と美を見ることを可能にさせる源泉である。「眼の光」といえば光を感じ、見る能力を指す。光と生命が神の本質である。古代シリアのキリスト教徒たちは家の門の上につきのような文字を彫りつけたり、貼りつけておいたといわれている。

Φ Ω Η
Ζ Ω C

これはギリシア語でタテが「光」^{φως} (φως)、ヨコが「生命」^{ζωή} (ζωή) で、タテ、ヨコを組み合わせると十字形となる。この十字は祝福と守護をもたらす神の名である。光と生命は神の本質であるだけでなく、自然的世界もまさに関

わりをもっていて、この存在の世界は光によって生命が生れ、生命が持続し、展開している。一般に何かを見る、（知る）という行為は、われわれの眼の行為で見るのである。なぜものが見えてくるか、それは光がものに当り、反射しているからである。換言すれば、光によってものが見える。「わたし」が見るのではなく、光によって見える。眼も光を持っているが、先験的に与えられたもので、光によって光が見えるのである。

古代ギリシア人は太陽を見ることは、生きることと等しい。すべてのものを生み出す太陽は、生命の光と呼ばれた。このような光と生命の十字形はすでにオルフォイス教団の讃歌（Ⅲ[7]18）に見られるといわれている。このような形態は宗教や文化の差異を超えて、受容継承されるものである。それは光と生命は人間にとって根源的な問題性を含んでいる。

火の習俗

——火柱、かがり火、蠟燭

古代ゲルマンでは「冬至の火」（Wintersomnwendfeuer）と称し、のちに「クリスマスの火」（Weihnachtfeuer）と名が變つても、火をさかんに焚く神事、習俗が古代ゲルマンから中世、現代に至るまで伝統として存続している。ヨーロッパでは年間五回、公けに部族や町村の共同体で大きなかがり火や火柱を焚いて祭を行い、季節をしらせた。冬が終わったしるしに、二月の最後の日か二月八日頃、二月はかつてはローマの暦では一年の最後の月、つまり浄めの月であった。五月祭の始まりの五月一日、六月二十二日夏至の日（聖ヨハネの火祭）、秋の終りを告げる十月の終りか十一月に焚く収穫の祭である。冬至の祭の火は、一年最後の行事になるが、同時に新しい年への最初の出発点ともなる。

たいまつのは古代オリエント世界でも公私の生活で浄めを行う重要な手段であった。さきにあげたアントニウスベルゲの山の上の火の柱、アイスフェルデンの畑の多くのかがり火を焚く習俗では、あとに残った炭や灰を畑にふり撒いた。これは豊作を約束する素朴な肥料である。またたいまつを点して走る走者（多くは若者）が家々や街路を照らすとき、その火の光は畑や家を潔める新しい「年の火」(Jahrestener)である。同時に畑に害を与える虫や病気を防ぎ、種子を浄めるものであった。

火はまず暗がりや夜を明るくし、生活の環境を暖かに保持してくれる。つぎにものの煮焚きによって食物を調理する重要な役目をもつ。さらに棍棒などを火に焼くことによって一層頑丈なものにすることができ、鉱物を融解させ、鍛錬し強くすることを発見し、やがて銅器、鉄器の道具を持つようになる。宗教的には火を燃やして神を迎え神を送る。闇の中で燃える火は、人間の心の昂揚、意志や感情を現わすものであり、人間の生命、呼吸、否、存在そのものを象徴するものと考えられてきた。自然の光の源泉は太陽である。この太陽を髣髴と思ひ浮かべるのは、火の柱、かがり火である。また車輪に縄をまきつけ、これを火中で燃やし、山の上から谷へと転がす習俗もある、燃える車輪がどんな風に下へころがっていったか。落ちてゆくうちに、火が消えたか、下でなお勢いよく燃えていると、次の年の豊作は間違いなしと喜ぶ占いもある。このような行事は聖マルチン祭や二月頃のファスネットにも行われる。占いはとに角として、この火の輪は太陽を象つたものであるといつて、ほぼ誤りではないであろう。スウェーデンのトロントハイムの遺跡には太陽を象つた車輪が発見されている。太陽神、あるいは主神は火の車輪の馬車に騎つて天空を駆けると表象されて、ヨーロッパにおいても祭の行列、行進には、とくに夜の場合たいまつを点し、これを手に掲げて町や村を歩くのは、やはり共同体を浄め、聖化する目的である。オリンピアの聖火は、オリンボスのゼウス、ヘラ神殿で新たに天の光をレンズに集めて点火し、たいまつに移して、走者が競技場へと運ぶ。

神殿から祭の行われる町や村への火の搬走はギリシアはむろんのことヨーロッパの各地で見られる習俗である。

蠟燭が発明されてから、これはかまどの火以外に家庭の中の宗教に不可欠なものとなった。二月二日のマリアの光のミサで潔められた蠟燭は、日常のミサ、クリスマスツリー、祭壇に点される。聖マルチン祭にはかつてはたいまつを掲げて行進してマルチンを迎えたが、提燈^{ランプ}に蠟燭を点して行うようになる。蠟燭は白、赤、黒、その他色分けがあり、普段は白、祝いには赤、服喪葬送などには黒を用いる。夕食には電灯よりも蠟燭を点すことが多い。誕生日の祝いの習俗は、日本にもすではいつて来ている。悪魔、魔女を防ぐには、三本の蠟燭を立てると、近付かぬという習慣もある。夕立、雷鳴、電光のとき、蠟燭を燭台に立て、これに火を点して窓際に置くくと落雷にあわぬといっているのは、ドイツ東南部バーマーヴァルト地方の習俗である。雪が降るときも、農家は蠟燭を点して安全を祈る。かまどの火を移して部屋で燃しても良い。子供が新たに生れると、ベッドのそばに蠟燭を点して祝う。人間の生命を蠟燭の燃えている長さで見做し共感する。結婚式における蠟燭をかかげての行進も同じである。蠟燭をおして、明るく生きること、永遠の光への比喩を人間はたえず見出そうとつとめている。

ゲルマンの伝承

冬にはいると、ゲルマンの主神ヴォーダン (Wodan) は眷族を引き連れて、天空を疾駆し、この地上は凄まじい様相となる。ヴォーダンは風、嵐の神といわれ、同時に勇敢な戦士を守る戦いの神、狩猟の神として崇拜された。とくに、雪を捲き上げて風が吹き荒れるとき、「夜の狩人」(Nachtjäger)、「荒々しき嵐の狩人」(Wildjagd) と呼んで民間伝承ではおそれた。白馬に騎る主神は、白い髯のエッカルトという老人の先導のもとに、ドラク (Drak) という山犬、鴉、梟、奇怪な竜蛇、がまがえる、いもり、蜘蛛、むかで、山の妖怪コーボルト、森や山の精、水や

苔の精、救われずさまよう死者、ベルヒタ、ホレなどの魔女を引き連れて走ってゆく。もし夜道で出会うことがあれば、身を伏せて通りすぎてゆくのを待たなければならぬ。この天の魔群をからかったり、笑ったりすれば、「一しよに狩にゆこう」と引きずられ、たちまち踏み殺されてしまう。このような伝承は、キリスト教化が深まるとともに、ゲルマンの神々や精霊が不気味なものに変えられていった結果と思われる。

夏、秋に農作物、果樹の収穫を終えた農民は、冬にそなえてこれを穀倉に貯え、肥えた牛、豚、羊、鶏、鶯鳥などを家畜小屋に引き入れる。やがて畑や牧草地には霜が降り雪が積もり、人間が活動していた空間は、冬に占領され、狼などが跳梁する世界となる。人間は余儀なく後退して、家に閉じこもり、脱穀したり、糸を紡いだりして、ひたすら春の到来を待ち詫びる。

春から夏、夏から秋へとすべてのものを芽生えさせ、育てやがて稔りをもたらす自然の精霊を「美しきベルヒタ」(Schöne Perchta)と呼んでいる。ところが黄ばんだ葉となり、褐色に枯れると今まで人間に恵み深く、やさしかった自然霊は、冷たくよそよそしく、ときには人間を脅やかしく、危険に陥れるおそろしく「醜いベルヒタ」(Schlecht Perchta)になる。このまゝ、死の世界、冬の支配する世界では、人間は死滅してしまふ。人間はひたすら新しく美しいベルヒタが誕生するように神々に祈るのである。いかにして寒く冷い死から温かい生の世界へ転換するか。虫も鳥も姿を見せず、草も木も枯れ凋んだ中で、ひとり緑の葉をつけている樅や松、唐檜、桧などは、わずかに生命の存続を感じさせるものであり、桜桃、杏の枝を切って瓶に挿し、温かい部屋で開花させたり、麦の種子を皿に入れ、水に浸してその発芽の状態をうかがうのもその心情の現われである。さまざまの動植物や山岳、気候などから生命の春への徴候を人間は知ろうとする。しかしその中で決定的なものは、冬至である。冬至の転換は、直接眼に見えるものでも、感覚的に感取できるものでもないが、新しい光の誕生、春を約束するものである。

夜の狩人たちは、冷い風や雪風の音、樹立が鳴き叫び、狼が遠吠えする声とともに不気味な音楽を奏でて通りすぎる。しかし踊ったり歌ったりする魔の群にまじって美しい魅惑的な音楽が仄かにきこえてくることがある。その美しい音色に聴き惚れる。それはこの冬のさ中にきこえてくる春の声である。幽かではあるが春が近づいている気配を感じさせるものがある。またこの不気味な天の魔群「荒々しい狩人たち」の群にまぎれて、美しい白い「光の乙女たち」の姿を見かけることもあるといわれる。この冬の深夜の仄かな光の変貌を「光の乙女たち」(Lichtjungfrauen)と民間伝承では呼んでいる。この乙女たちは、まぎれもなく先触れする春の光である。このような春の光を予感することは、キリスト教においては、のちの冬至の日の聖者となる聖ルチアの習俗の中にいくつか伝えられている。それについては後の個所でふれるつもりである。

ゲルマン人と同じように、スカンデナヴィアのノルマン人も暗い冬の季節、とくにクリスマススの頃を「エル」(El)と称してさかんに祭をおこなっている。これをユルの祭と呼んでいる。冬に収穫の感謝し、次の年の豊饒を願って祭を行っている点は共通である。ゲルマン人、ノルマン人は冬至の日の天体に関する正確な知識をある時代まで持っていなかったと思われる。冬至に関する知識をもたらしたのは、キリスト教とローマ文化であった。それゆえキリスト教がもつとも長い夜(闇)の中から、新しい光が誕生する冬至の日に、同時に救いの光、希望の灯火となる幼児イエスが誕生することは、途方もない寒さと不安に生きるゲルマン人、ノルマン人にとっても喜びの祭として心魂に浸透し、生活の中にキリスト信仰が定着していったと思われる。

十二月十三日ルチアの日

黄金伝説によれば、ルチア(Lucia)はシラクサの貴族の家に生れた娘で、三百年頃、キリスト教迫害の劇しかっ

たディオクレチアヌス帝のとき、殉教したと伝えている。母はエウテキア (Eutychia) といい、長い間病氣を患っていたので、ルチアは母を伴ってカタニアの聖アガタの墓に詣で、祈ったところ、病氣が癒された。このことを感謝し、ルチアは生涯処女のまゝでいること、財産を貧しい者に施すことを神に誓った。彼女の求婚者はこのことを知り、裁判官パスカシウス (Pascius) に訴え出たために、取り調べを受け、牢獄につながれた。キリスト教の神を捨てて、異教の神を信ずるように命ぜられたが、ルチアは拒絶し、火刑に処せられる。しかも火も彼女を焼くことはできなかった。最後に喉を剣で刺されて殉教した。裁判官はルチアを娼婦のいる神殿に連れてゆき、娼婦に堕し、彼女を導く聖霊を追い出そうとしたとも伝える。ルチアの歴史的事実性は疑いないにしても、きわめて伝説的であり、比喩的な要素がつよい。ただしルチアをとおしてキリスト教が娼婦神殿を批判している点を看過すべきではない。ただフォラギネがルチアの名は元来「光」(Lux)の意であり、ルチアは「汚れなき処女」として天上的愛を注ぐ存在であること、ルチアとは「光の道」(Lux Via)の意味であると解している点、きわめて暗示的である。「光の道」とは、「光を運ぶ者」「光をもたらす者」という意味を持っているからである。

紀元後四〇〇年頃には、聖ルチアの崇拜がシチリア島で盛んとなり、シラクサのジョンバニ カタコンベ (Giovanni Katkombe) の碑文にルチアの祭が記録されている。ルチアが光をもたらす者ということから肉体的眼、精神の眼の守護聖者となり、眼の病いを癒し、眼の災いから守る者となった。シラクサの聖堂の中にルチアのカペルレがあり、銀の聖女像がある。さらにヴェネツィアにおいては、聖マルコ教会とならんで聖ルチア教会があり、ヨーロッパのルチア崇拜の中心となっている。これは十三世紀後半彼女の聖遺物^{レリキエ}がこゝに祀られていることにもよる。ナポリの民謡、「サンタ・ルチア」(Santa Lucia)は月の光に聖ルチアを想い浮べ、海に船を漕ぎ出す歌の内容は、ルチアが民衆に親しまれ、心の中に生きてきたことを示している。

中欧においては一〇〇〇年代にはルチア崇拝が最高に高まったのは、九七〇年オットー大帝がメッツにある聖フィンツェンツ (St. Vinzenz) 修道院にルチアの聖遺物を移して祀ったことや、アイフェルに在俗のルチア兄弟団が出来てここが崇拝の中心となったことなどにもとづいている。大グレゴリオは聖徒名簿 (Mekkanon) にルチアの記念日を取り上げており、重要な存在となっている。その記念日の日は一五八二年に制定された。現在のグレゴリオ暦においては、十二月十三日となっている。それ以前のユリウス暦では冬至の日に当るのである。冬至 (Wintersonnenwede) はヨーロッパの生活、文化、思想にとって可成重要な位置を占めている。「光の道」を示し、「光を運ぶ」ルチアは、新たに光が長くなってゆく起点であるこの日に祭られるのがふさわしい聖女である。ものを見る眼に光を与えるという意味で、眼の守護聖者であり、盲目の人々、悔い改めた娼婦たちの聖者となり、類似連想からガラス製造業者や道を誤らぬよう馬車の御者の守護にも発展した。とくに農耕に必要な光を求める農民の守護聖者である。ニーダーライン地方では、「聖ルツィイは屋から門を通つてゆく」(Sente Luzie es et Korte van den Dach vorbei) という諺があり、チェッコ国境に近いペーマーヴァルト地方では「聖ルツァイは日を戻す」(Z'Luzei kehrt dr Tog ei) といひ、インタール地方では「聖ルツツェンは日を短くする」(St. Lutzen macht den Tag stutzen) という言葉があるのは、いずれもルチアが冬至に関わっていたことを示す。ルチアの夜は神聖な夜であり、この夜から改まって新年となり、冬季の始まりと考える時代が長くつづいていた。後代ルチアからクリスマス祭の間を十二夜 (Zwölfachte) と見做すところが各地に残っている。この十二夜を年間の十二ヶ月に見立て、一晚づつの変化の中に翌年の豊凶を占った。大きな転換点に当る冬至の夜は、当然多くの占いやタブーが生れる。

ルチアの夜の予見の諸様態

この冬至のルチアの夜、「ルチアの輝き」が現われる。十一時頃から戸外に出て寝そべって待っていると、ふるような光が家の屋根の上をゆっくり動き、もつれるようになり、さまざまな姿や形をとって消えてゆく。これはだれにでも見えるものではなく、特定の人だけが見るといふ。ある農夫は、養父の家の上に浮ぶのを見、その光が冠になったり、死者の頭になったりしたという。もしこのルチアの夜目を醒しておらず、うっかり眠り込むと、ルチアはその者にさまざまな病氣や災いを降して罰するという。ルチアの夜に新しい光の動きや変化が見られるということから、このような真夜中の行事が生れたのであろう。このような夜空に異常な変化を見るのは、十二月二十四日の荒野の羊飼たちが星の動きや天使の告知の聖書的な出来事がルチアに影響を及ぼしたものであるか、それとも古いゲルマンの宗教の習俗に基づくものであるのか、今ここで決定的な論断はできない。

村の若者とならんで若い娘たちの間にこの夜つぎのような習俗がある。チロール地方のエンスブルック、バイエルン地方では、この夜柳のもとにゆき、日の当る部分の木の皮を剝し、アンドレアス風の××斜十字架を刻みつける。これを「ルチアの十字架」(Luzienkreuz)という。この十字架の上に小川の水で濡らした木の皮を再び貼り、しっかりと結びつける。これを十一時から一時間以内にやり遂げねばならない。これより遅れると、娘は翌朝樹の下で息絶えるという。新年の朝皮を剝して十字形をみると、不思議な謎めいた形になっており、これによって娘たちは自分の未来についてあれこれ占う。このような習俗はキリスト教以前のゲルマン、あるいはケルトの遺習であると思われる。

ルチアの日の重要な行事に、「ルチアの小麦」(Luzienweizen)と呼ばれるものがある。この日皿の上に小麦をのせ、水を浸し、その真中に蝋燭または油の小皿に燈芯を置き、クリスマスの日にクリッペまたは「主なる神の隅」

(Herr-Gottswinkel)、あるいはクリスマスツリーの下に置く。ルチアの日より数えて十二日目麦の芽の出具合を見て、来るべき年の豊凶を占う。小麦はキリストを象徴するもので、ルカ福音書でのべているごとく、キリストは十字架で死し、人々から見捨てられながら、罪を償い、世の救いとなる神秘の小麦である。キリストと小麦は同一視され、最後の晩餐に弟子とともにパンを食べる。それゆえ皿の上の小麦は救世主の誕生を表わす。

この冬のさ中に小麦の芽が出ることは、キリストの超自然性を象徴する。ルチアの小麦の発芽は、十二月四日の「バルバラの枝」に花を咲かせるのと同じ意味を持っている。「ルチアの花」といつてクリスマスに咲かせるところもあり、かならずしも小麦とは決っていない。花や小麦の開花や発芽をクリスマスにつなげると同じように、このルチアの光はクリスマスの夜に飼葉桶クラッペの上にとどまる星の先駆者であるといい、また幼児キリストを拝みに来る東方の賢者（三王）をベツレヘムへ旅立たせる前ぶれでもあるともいわれている。ラウエン（Rauen）地方には、「ルチアの日には何もかも隠すことは許されぬ」（Am Luzientag darf man nichts verbergen）という諺があるように、新しい光が全てを照し出すと考えられている。

フルステンフェルトの灯籠流し

現在ルチアの日にまともって祭を行うところはきわめて少ないが、バイエルン州のフルステンフェルトブルック（Fusenteidbruck）市は、イザール河の支流アンペル川の畔にある人口八千人程のひなびた町である。ここには灯籠流しの行事の古い習俗を伝えている。十二月十日頃小学校、中学校の子供達は紙で市庁舎、教会、記念の会堂や各自の家を型取ったものを造り、窓には色とりどりの紙を貼り、少年、少女たち思いおもいの紙の家を持って十三日の十五時頃、フィリップ・ヴァイス・シュトラッセの前に集合し、群れをなして聖マグダレーナ監督教会に

赴き、そこで司祭からルチアの光の祭の祝福を受ける。再びレーダーガッセから教師の指導のものに川べりに架っている小さな栈橋のところにゆき、家型の灯籠を板の上に載せ、蠟燭に火を点して川へ流す。雪のちらつく川面に灯を点した灯籠がゆらゆらとゆっくりと流れてゆくのを岸べや橋の上から見送る子供や大人たちは、やはり去ってゆく旧い年、新たに迎える年の境に立つ想いがあるのである。アンペル川を群れたり、長く連なったり、ひとところにじっと浮んでいたりなどさまざまである。これはフルステンフェルトブルックの人々にとってしななければならぬルチアの日の行事であり、これなくしてはクリスマスも新年もやって来ないのである。

この市の伝説によればアンペル川が大洪水を惹き起し、被害を受けたことがあり、それ以後家が洪水でこわされぬために、犠牲として家型のこの灯籠を流すようになったといわれている。もしそうであれば、川の精霊を鎮める祭とも解され、一種の贖罪のごとく見える。しかしこの市ではすでに十六世紀以来ルチア崇拜が行われていたようであり、光の聖女にちなんで蠟燭をともして川へ灯籠を流し、一年の罪を流したのではないかと思われる。記録によれば一六二一年頃から小学校の児童らの行事となったといい、それ以前には大人達の行事であったと考えられる。ルチアの夜ではないが、家の型の提灯に火を点し、川に流す習俗はオーストリアとスロベニア国境の近くのアイゼンカッペル (Eisenkappel) 町でも二月二日のマリアの光のミサの前夜に行われている。

慎しみの夜

これにたいし、ルチアの夜を慎しみの夜として麻や木綿の糸を紡いだり、布を織るような仕事は一切行わないという女性の習俗がある。裁縫の針を休める日である。もしこれを守らないとルチアがやって来て糸をすべて絡ませたり、布を引裂いてしまうといい伝えている。またスウェーデンではこの日に豚を畜舎の外に出してはならないと

いうタブーもある。出すとしらみがたかる原因になるからだという。ルチアの夜は十二夜（燻し夜）の始まりの日であり、物の怪^け、魔女、さまざまな自然の悪い精霊が徘徊し、暴れ出すといい、いろいろな薬草（よもぎ、いらくさなど）を燻してこれを追払う習俗がある。主の祈り（Vater Unser）「天にいます父よ」を唱え、春の復活祭に用いた燃えさしの木の株を「ユダヤ人の炭火」（Juden Kohl）を燃やし、「聖ルチアよ、わたくしたちをお守り下さい、翌朝早く起きるまで！」と祈りをささげる。

ルチアは光の運び手である。反面、一年間でもっとも日の短かい暗い日というイメージから、ルチア自身も暗い不気味な存在として表象する習俗がある。ザルツブルク、バイエルン、ブルゲンラントなどの山岳地帯では、「ルツツェルフラウ」（Lutzel Frau）、「ブードルフラウ」（Buddl Frau）といい、藁で身をかくし、髪をふり乱し、箆を背負って、親のいいつけを守らなかつたり、躰^みけの悪い子供や若い娘を捕まえて箆の中に放り込み、腹を割き、その中に藁や小石をつめ込むという。これは子供の躰^みけのためであったが、いつしか恐ろしい存在の相をとる。ブードルフラウはゲルマンの自然霊ペルヒタを指すこともあり、ルチアとペルヒタが一緒になって村を歩いて悪い子を探しまわるところもある。

ところが白い衣装で身を包み、さらに黒いヴェールをかむつたルツツェルフラウが町や村を歩き、子供のいる家を訪ね、甘いお菓子や果物をプレゼントする恵みの施与者として聖ニコウスのような存在になっているところもある。バイエルンではこのルチアの日をシュベヒトの日（Specht-Tag）とも呼んでいる。シュベヒトとは啄木鳥^{きつこ}のことであり、きつつきのような嘴を持ち、鳥の頭の仮面をつけたルツィアが良くない子供をつつき出す。これをルツカ（Luxa）とも呼んでいる。

しかし他方、修道院の尼僧のように茶と黒の服装をし、顔に白いヴェールをつけた上に黒いヴェールをかむり、

庭の樹のかげに身を隠し、良い子たちにパン菓子を与える慣わしがある。ここでは聖ニコラウスが厳しいお供をつけて歩くのとは異なり、二種類のルチアの姿になっている。これは白い衣装やヴェールの上に黒いヴェールをかむっているのを見ても明かなように、日の短かい冬至の日は、もつとも暗い日であるから黒いヴェールであるが、その下からは明るい光が始まる最初の日という意味で白いヴェールをまとうているのである。ブルゲンラント地方ではお菓子をもってくるルチアを待ち望んで、子供たちがつぎのように歌う。

ルツツイ、ルツツイ、キッティコッティ、キッティコッティ、

二、三つ置いてつて下さい。

乾し梨を待ってますよ！

もしペーコンがもらえなけりや

梁桁はりげたをこわしてやるぞ

もしソーセージがもらえなきや、

ユーデイトを連れてくるぞ！

スウェーデンのルシアの習俗

スウェーデンではドイツやオーストリア、スイスのようにルチアを二重の相貌で表わさず、光の乙女達の姿で表現する。キリスト教の伝道が比較的遅れてはいつて来た北欧では、カトリックの古い習俗にとらわれることなく、福音派の独自のルチアの表象をとる。スウェーデン人はルシアと呼んでいる。十二月十三日ルシアの祭には、乙女

たちが純白の衣装に赤い帯をしめ手に蠟燭をかゝげ、サンタ・ルシアの歌、その他を歌いながら、教会や家庭、職場などでこの日を祝う。とくにこの日の夜すべての灯火を消し、ルシアとなった乙女が蠟燭のまたゝく冠を頭にいただき、手にする蠟燭の火を待ちうけている教会の人々につきつぎと移し、やがて教会全体が明るい光の海となつて、一せいに讃美歌を歌い、ミサが行われる。各家庭や職場睦まじい仲間同志でルシアの役をつとめる乙女が、同じように光の冠をかぶり、コーヒ―、パン、菓子一盆にのせて、家の人々にサービスする。この日には特別に胡桃、チョコレート、香料のはいつたグレッグというワインを飲んで祝う。スウェーデンではノーベル賞受賞の祝いを、このルシアの日に行い、ルシアとなった乙女の冠の蠟燭にノーベル賞受賞者によつて火をとす慣わしとなつてゐる。この日は清純な若い娘たちが主役であり、雪が降つても、北欧に俄かに明るい春の光が輝き出すような気分になるのである。ルシアの祭は本来このような明るい喜びにみちたものであつたかもしれない。このようであつてこそルシアはベッレヘムの星の先駆者であり、飼葉桶の上にとどまる光の一つである意味が明らかになる。スウェーデンではこの日に桜桃の枝を切り、ストーブの背後の瓶に挿し、さきに十二月四日、「バルバラの枝と同じような習俗がある。「飢えた人々にパンを、闇に燭の火を点そう!」とも唱えて、小学生たちが街の通りを歩む。暗闇の中から新しい光が誕生することを、キリスト教もそれ以前のノルマンの宗教も求めてきた。その具象化として象徴的に聖ルシアで現わし、乙女が蠟燭を照らして祝うのである。

ルシアの習俗（補足）

十二月十三日、^{サンタ}聖ルシアは「光の女王」(Licht Konigin)の習俗はスウェーデンからフィンランドにかけて行われている。ルシアの名のごとく「光輝く者」は、スウェーデンでは古い予言と結びついている。ルシアの光がブロン

ドの頭に照っているかぎり、スウェーデンの国に天の光は沈むことはないという意味である。それゆえ毎年多くの若い女性がルチアになる名誉を受継コシムツシヨシぐとする。地域のルチアの集い（協会）でクリスマスの前に提出された多くの写真から、予選で十人が選ばれ、さらに最後の一人が選択される。ルチアの女王に選ばれる条件は二十一才以下、ブロンドで未婚であることが条件である。祭の行列が市中を行進し、市庁舎で榮譽の女王の冠が載せられる。このルチアの女王は貧しい人々を助けたり守ったりする模範を示すためで、美人コンテストではない。輝く光の冠の中で集った贈物を集め、貧しい人々身寄りのない孤独な人々、病院を訪ねて、施しをする。ルチアはふたりの少女をお供に連れて家々を訪問する。彼女たちはコーヒィやケーキをサービスし、つぎのような古い歌を歌う。

夜は重い足どりで

中庭や館や小屋を歩み、

太陽のない地上は影の中で夢を見ている。

きいてごらん、暗い家の中へ、

蠟燭をかがやかせて

聖ルチアサンタがはいってくるのを！

イタリアのサンタルチアのメロディーでこのようなスウェーデンの歌詞が歌われる。二人の少女の代りに、合唱の少年、少女のグループがお供をすることもある。ルチアやお供の少女は長い白い衣装をまとい、頭の上に燃えてゆらめく蠟燭の冠をつけ、清楚な姿は、かつては光をもたらす北欧の春の女神であったが、やがてキリスト教の聖

女ルチアの姿でこの新しい生命をもたらす光への習俗にかわっていったのである。

スカンジナビアの諸国では他の国により長く徹底的に祝う。きびしい寒さと長い暗い日々にあつて、光や暖かさへの希求と憧憬が南の民族より強いからであらう。

聖トマスの日

十二月二十一日は聖トマスの日である。この日はいうまでもなく、冬至にあたる日である。ヨハネ福音書（二〇ノ二四ノ二九）によれば、他の使徒たちは十字架で死を遂げたイエスの復活に会い、キリストを信じたが、トマスだけは信じなかった。ところが八日目に、使徒たちの集る家にキリストがはいって来て、トマスに処刑のときのキリストの手の釘やわき腹の槍のさずあとを触らせて、「信じない者とならず、信ずる者となるべし」といった。トマスはキリストの身体の傷跡に触れ、「わが主、わが神よ」と叫んで、ひれ伏し復活のキリストであることを信じた。するとキリストは、「トマスよ、おまえはわたしを見て信じたか、見ずして信ずる者はさいわいである」と告げたという。キリスト教徒でありながら、キリストを信じない者、信仰薄い人々のことを、一般に「トマス・クリステン」(Thomas-Christen) 呼び慣わしている。疑い深く、不信のキリスト教徒の懺悔のために、この十二月二十一日に聖トマスを祭るようになった。この祭は起源は修道院におけるトマスの懺悔ということから、他の聖者と異り、もつともおそくキリストを受け入れたトマスは、一年の最後の冬至の日に祭りを定めた。聖者の祭の日がキリスト教的な思惟や情念をもって配慮されていることは、トマスだけに限られたことではない。

伝説によれば、トマスはガリラヤの貧しい漁師の子であり、キリストの福音をきいて最初に使徒となった人間であるにもかかわらず、ゴルゴタでキリストが十字架につけられたとき、ヨハネやマリアとはちがひ、群衆の蔭にか

くれて見守っていた。しかし一旦キリストの復活を信ずる出来事が起こったのちには、他の使徒寄りも目ざましく勇敢に信仰に生きた。エルサレムへ赴く途上、パリサイ派がキリストの一味を石で殺そうと待ち受けていた。この企みをおそれて使徒達はひるんでいるとき、「キリストとともにゆこう、彼と一しよにわれらは死なうではないか」とトマスは敢然と歩んでゆき、その気迫におそれをなし、手だししなかったと伝える。

使徒たちは分れて世界の各地に伝道をはじめたが、その中でトマスは東方インドに布教伝道に赴き、目ざましい活躍をしたのち、マイラプール(南インドマドラスの近傍)で殉教を遂げたといわれている。トマスはグンディヴァール(Gundivara)王のもとで宮殿建設の責任者となり、立派な宮殿を建てたために王より喜ばれ褒美を与えられた。しかし彼は王が国を離れて、旅をしている間にその金銀の褒美をすべて貧しい人々に施し、神の教えを説き、多くを帰依させた。帰国した王は怒ってトマスを牢に幽閉した。しかし王は夢の中で「地上に宮殿を建てるよりも、天国に宮殿をつくるべきである」と語るトマスの言葉に回心し、トマスをゆるし、広いインドの各地に宣教することを許したといわれる。

だが敵視する者がいて、教会の石の十字架の前で祈りを捧げているトマスを石で打ち殺そうとしたり、矢を射て殺そうとしたが、みな失敗する。最後に槍で背後から突き刺し、六七才で殉教を遂げたという。彼が祈っていた石の十字架は十二月二十日頃から赤味を帯び、翌二十一日に血の如くなるという伝説がある。可成古くからキリスト教が広まっていたメソポタミアのエデッサ(Edesa)の町に、二二二年聖トマスの遺骨がインドから運ばれて来た。その後エデッサからエーゲ海のキオス(Chios)島へ、さらにここからナポリに近いアドリア海のオルトナ(Ortona)にその遺骨が祭られている。またローマのサンタ・クロチエ教会には、キリストの右の傷口にさし入れた指が聖遺物として祭られている。

ポルトガル人がインドのゴアに植民地を造ったとき、宣教師も同行していたが、すでに千年以上前から使徒トマスがこの地に布教していて、その教えを伝えるキリスト教徒がいたことをシリアの秘典アポクリファは語っている。フランシスコ・ザビエルはこのゴアに一五四二年にセミナリヨを建てた。トマスの伝道によるトマスキリスト教徒は、シリアからの指導を受け、シリア風の教会の伝統を受けついでいる。いわゆる三王礼拝（一月六日）には、三人の少年が美々しく着飾って白馬に乗り、古いクエリム（Cuelim）の教会まで町を行進し、そのあとに信者がついてゆく。この聖なる三人の王に触れたら、その年は幸運に恵まれるという習俗がある。このような習俗はアジア的、インド風ともいえる。

聖トマスは、建築家、測量士、家具師、石工などの守護聖者として崇められ、画像では手に定規を持っている。あるいは殉教を遂げたときの槍を手にもすることもある。十二月二十一日が祭日になったのは、エデッサに彼の遺骨を移したのを記念したという説もあるが、やはり冬至の日に意味があつたのであろう。一九五二年トマスの聖遺骨がローマより教皇の贈物としてインドに贈られ、ボンベイの司教がこれを奉持し、トマス教会の新しい聖所祭壇に祭られるようになった。つづいて一九六九年、トマスの祭日は七月三日と改められている。

トマスについては、さらにさまざまな伝説が後になってまわっている。トマスは使徒たちの中ではもつとも遠いところであるペルシア、インドへ伝道していたので、マリアが昇天したとき、間に合わなかった。報せを受けて駆けつけた彼は、マリアの最後の姿を一目見たいと思い、墓を開けてもらった。しかしマリアは清浄に徹した生涯であつたために、心も身体もそのまゝ昇天し、マリアの面影を伝えるものはどこにもなかった。石棺の中にただとりどりの美しい花や草があり、芳香が漂っていた。マリアはトマスが再び疑いを持つのをあわれみ、昇天の証しにと天から腰帯チントラ（Cintola）を投げ与えた。そのとき天使の讚美のコーラスがきこえてきたと伝えている。この昇天の

マリアの腰帯は現在もプラトーの大聖堂に祭られている。

トマスの日の習俗

十二月二十一日トマスの日は農民にとってつぎの年の天候、豊凶の占いの日として重要視されて着た。もともと冬至の日であるから、当然のことである。

聖トマスの日が暗ければ、
すばらしい新年になる

冬至の日が暗いのは当然であるが、なお雪が劇しくても、よい新年になるという天気占いの諺である。同時にもの忌みの日ともなっていて、「トマスには洗濯をしてはならぬ、すれば魔に投げ倒される。」といわれている。この日は洗濯、糸の紡ぎなど禁じられている仕事で沢山ある。この日水に入れた壺に大麦を蒔き、萌え出た芽の具合をみて、来るべき十二月の天候を占うこともあり、チロール地方ではこの夜にクリスマススのパンを焼く。輪型のパンは幸運をもたらすという。太陽をかたどったものであろうか。ウェストファール地方ではトマスの夜大いに飲み食いしなければならぬ。さもないと餓死することがあるといひ伝えている。大麦の占いは、十三日の聖ルシアにつづく農事の占いである。クリスマス季は占いの日が多い。このトマスも若い娘たちが行う占いがいくつかある。とくにトマスの占いをあげてみたい。

寢台よ、わたしはおまえにひざまずく

ヘルシエダーメ (Herrschedame) よ、お願いです、

心から愛するわたしの人を

わたしに現わして下さい。

このように唱えながら、うしろ向きのま、ベットにたおれ、その瞬間に見えた人が花婿になる人である。あるいはつぎの年に起ることが見えるともいう。ヘルシエダーメは本来「Herr Senf Thoma」(聖トマス様)が訛り、トルチアの日をもって十二夜の始まりとするとところがあるように、トマスの日を始まりとする地方がある。この日から嵐の狩人、天の魔群が暴れ出して、人家を襲うといい慣わし、物忌み、慎しみの日となったのである。香りのよい葉草などを燻したり、ユダの炭 (Juden Kohl) を燃やしたりするのは、トルチアの日と同じである。風の吹き荒れるのを防ぐために、家畜小屋に十字架を三つ釘で打ちつける。さもないと馬が魔群のために息絶えたり、引裂れたりする。打ちつけたあととは、だれも家畜小屋にはいつてはならぬというタブーもある。

フレイザーの報告によれば、マン島 (Insel Man) では高い所で大きな焚火を燃やして、トマスの夜を明したという。アレントーケン (Allentaken) では山羊を屠って犠牲にさ、げるという。これらの習俗は、聖トマスの祭よりもさらに古く遡ってゲルマンの古習俗を伝えるもので、いわば冬至の原始的習俗とも見るべきものである。このようにトマスの日の夜はもつとも長い夜であるとともに、新しく昼が長くなる出発点であるために、不幸や古い災いを消滅させ、新たに幸福を約束する日ともなった。

ローラーテのミサ

十二月六日の聖ニコラウスのあとに十二月八日は「マリア受胎の祭」がある。この日はマリアが天使ガブリエルから神の子を宿すことを告知されたことを祝う日である。教会で「ローラーテ コエリ」(Rorate Coeli)のラテン語の歌詞で始まるミサが唱えられるところから、「ローラーテのミサ」と呼ばれている。「天の露よ下りませ…」という意であり、受胎の祭よりは、この呼び名が一般的になっている。この八日のミサはいくつかの特質をもっている。

普段のミサとちがってひじょうに早く四時、五時、六時に行われる。そのために早起きして教会に赴かねばならない。雪が降っているか、止んでいても雪や氷の道を踏んでゆく。中欧の五時、六時はまだ暗い夜である。教会もこの日はすべての灯火は消えている。そこで集った信者たちは司祭が新しく点ずる蠟燭の光をつぎつぎ点して、教会の祭壇をはじめ、柱や窓到るところにつけてあるろうそくに火をつけ、各人が手に燭火をかかげて、教会が煌々と明るくなると、ミサが始まるのである。

あなた方天よ、正しきものを露と下りませ、

雲よ、雨と降らせしませ、

絶望せるものに告げる、

強くなり、ひるむなかれ、

見よ、われらの神来り、

われらを救う

いざ、われらの主に

ここに来る王に感謝せん

その他アドベントの期間にふさわしい讃美歌が歌われ、司祭とミニストラントが、「見よ、処女は身ごもり、子を生まん」と唱え、これにたいし信徒が「そしてその名はインマヌエルと呼ばれん」と唱える。いよいよクリスマス将近付く感が強い。冬の暗い夜に光を点すのは、罪に沈み、神の遠さを感じる人間には、救いの光となる儀式でもある。ミサが終って、再び家に帰ると、あたたかいスープやコーヒーの香りのたちこめる朝の食事がすでに待ち受けているのである。

受胎告知の祭には、若い娘が白いベールで顔をつつみ、祭壇の前で跪づき、祈りをささげている。天使ガブリエルに扮した青年がルカ福音書の叙述のごとく、「めでたし恩寵に満てるマリアよ」と唱え、神の子の受胎を告知する。これにたいして「われは主の婢女にすぎず、されど御心のまゝにならせ給え」と答える。これにたいし、エンゲルアムト (Engelamt) と呼ばれる天使の役の青年が、朗唱し、参加している信徒がいつせいにローラーテの讃美歌を歌う。この歌以外につきのような詩も朗唱される。

澄んで輝くグラスを太陽が照射するが、

しかしグラスを壊すことはない、

そのように神の子は処女に宿り、生れ、

幼児は銅葉桶にねている、

この地上でわれらために
大いなる償いを果たそうとしている。

このように、マリアの受胎が透明で清らかなグラスに射し込む太陽の光の比喩で歌われている。キリスト誕生の前のマリア受胎劇もあり、絵画、彫刻を教会の祭壇に飾ることもある。

神の子の受胎を祝うこの日は、救いの光の誕生という意味で蝋燭が沢山点される。同時に地方によっては、農民はローラーテのミサが始まる前、麦の種子を祭壇の前で水に浸して、新しい生命の発芽を祈る行事が行われる。一粒の麦として贖罪の十字架の死を遂げるキリストの誕生は、農民にとって麦を水に浸し、祭壇で潔め、神の祝福を祈り、来るべき春に豊饒を願う形態となる。

古くはこのローラーテの日を「マリアの日」(Frauentag)と呼び、オーストリア、ザルツブルク地方では、この日を期して「マリア迎え」(Frauentragen)あるいはマリア(ヨセフ)の宿探しの行事が始める。これについては「マリア迎え」の章でふれているので、ここでは他のことを書き添えたい。この「マリア迎え」は敬虔な行事である反面、マリアを泊めた家で賑やかに踊ったり、騒いだりしたので、教会ではこれを禁止し、一時衰微した。しかし今日再び敬虔な習俗のみを残して今日にまで至っているのである。このマリア迎えの先行にはゲルマンの女神ネルトス(Nertus)信仰が強く根を張っており、これをキリスト教化するために行われたらしい。ネルトス、あるいはフライアなど農耕に関わるゲルマンの女神の祭には、さかんに踊りが行われ、豊饒を祈ったらしい。これを踏襲したためとおもわれる。このようにローラーテのミサの日は、アドベント期の中でも注目すべき行事があり、さまざまな祭の出発点ともなっているのである。また北欧やドイツ北部の地域ではこの日を期してパンを焼く習慣もある。

十二燐し夜から三王礼拝まではパンを焼いてはならぬという慣わしがあり、クリスマス用にさまざまな種類のパンをあらかじめ作っておくのである。

ゲルマンの神馬について

スコットランドの氷河遺跡湖の一つネス湖に前世紀の怪獣が棲んでいて、その姿を見たとか、その尾や背中を写真に撮ったとか、新聞などで騒いだことがある。しかし今から六十年前にもネス湖に馬の姿をした奇妙な動物がいて月夜に泳いでいる姿を見たという話が広まったことがある。スコットランド人は精霊、祖霊、妖怪を信じている傾向が強い。「馬の姿」をした怪獣は、妖怪化された馬信仰の一形態である。ゲルマン人においても馬は古くから超自然的な動物、霊的存在として崇拜されて来た形跡が強い。馬はこの地上を疾駆するのにもっとも早い動物であり、索引力も強く、飼育して人間の何十倍にも匹敵する耕作力もあり、騎馬に用いるときは、軍事的におそるべき威力を発揮した。メソポタミア、エジプトが騎馬軍団をもつて威力を揮った。「エジプト人は人であつて神ではなく、その馬は肉であつて霊ではない」(イザヤ三二ノ三)とイスラエルの予言者が声を大にしてイスラエルの民に訴えたのは、その威力のおそろしさを知った上での反論であつた。

馬の疾駆する速さはゲルマンにおいては疾風に喩えられる。馬神は風の神として表わされ、ウォーダン(オーディン)と同一視される。のちにウォーダンの乗る馬をスライプニール(Sleipnir)と呼ぶようになるが、これは後になってのことで、馬と風は一体で迅速に走り、吹き過ぎて、一方から他方へ伝達する伝令、告知の役目を示す。タキトスがウォーダン神をローマのメルクール神にあてはめたのも、この風、馬の表象に基づいての解釈である。とおもわれる。ゲルマンの神話、伝承の中に「天の魔群又は狩人」(Wilde Jäger)とか、「夜の魔群」(Nacht Heer)

などといって、冬の到来とともに、主神ヴォーダン¹は劇しい風を吹かせて、荒々しい軍勢をひき連れて天空を疾駆しているとか、狩を行うとかいっている。戦場で勇敢に戦った戦士、英雄などの屍を馬に乗せ、天上のヴァルハラ² (Valhalla) の宮殿に運んでゆくといい伝えている。ヴォーダンはかならず馬に騎つて疾駆する。この神は元来生死を司る神である。

ミトラス神は四頭の馬に車を牽かせて天を駆け、ヴィシヌヌ神も光る馬に騎り、あるいは馬の姿をとって天空を駆けるといわれている。ヨーロッパの長い歴史の過程の中で「白馬の騎士」(Schimmel Reiter) の伝説が生まれている。「白馬」といっても、たんに「白」ではなく、「光り輝く」あるいは「幻」といった意味である。白馬 (Schimmel Pferd) は太陽神、あるいは神の騎る馬であり、神聖視されるとともに、その荒い鼻息、いかなきは予言的な意味を持つと信じられた。それゆえ、白馬の騎士は、はじめは神のことであり、後にヴォーダンなどの神々を指す。やがてゲルマン英雄伝説の英雄の騎るものとなり、キリスト教聖者マルチン、ゲオルク、ニコラウス、ステファヌス、大天使ミカエルの騎る馬はみな白馬であり、クリスマスに天上からやって来るキリストも白馬に騎っている。これらはすべて光り輝く霊的馬であることを意味している。北ドイツの文学者テオドール シュトルム (Theodor Storm) の最後の傑作といわれる「白馬の騎士」(Schimmel Reiter) という小説は、ある領主がユトランド半島の低湿地帯に私財をなげうつて堤防を築いた。嵐の夜に堤防を守るべく見回っているとき、大波にさらわれて死ぬ。この主人公が堤防を守ってくれた行為に感謝し、村人達はその後心を合せて堤防を守るようになった。白馬の騎士はここには中世以来の霊的存在であり、キリスト教の犠牲的精神の象徴となつて生きつづけている。

雲も天空を駆け、馬と見做された。さきに述べたように雲が早く移動するのは、風の力によるものであり、馬は風、雲の象徴ともなる。疾風迅雷という言葉があるが、原始、古代の人々が体感できるもつとも早い運動の現象で

ある。原始から人間は雷をおそれた。電光（稲妻）の中に疾駆する馬を見たとか、馬に駆る神の姿を思い浮べたのは、俄かに起る夕立の雲の動きの早さは、馬をもつてするよりほかに比喩はあり得なかつたのである。持続する時間を破つて突如死は訪れる。日本は中世で聖餐来迎がいわれ、とくに早来迎^{はやらい}と称して急速に行者に訪れる現象がしばしばテーマとなっている。仏教的に表象される以前、馬に乗って生の世界から死の世界へ旅立つという考え方があつたことは、魂祭に死者、祖霊の乗る馬として茄子、胡瓜に箸を刺して馬型を作り、あるいは藁で馬型を作つて棚に供えたり、家の門口にならべたりするのは、その古い習俗の名残りである。ゲルマン人も馬は死者を生の世界から死の世界へ連れ去る神的な役割を持つていた。馬は疾風のごとく生死の境から霊の世界へ運ぶ雲のごとき存在、霊的存在、あるいは神の使者である。冬至、十二夜の頃、祖霊や死者の使者が家に帰つて来る。もてなして送り出すとき、生前死者が好んでいた馬、よい馬のたずなを解いて庭に置く。すると霊たちはそれに乗つて帰つてゆき、遠い森や畑に乗りすてあるのを見て、無事に帰つていったと喜ぶ。キリスト教においては死んだ第一夜は聖女ゲルトルートか聖女バルバラに守護されるが、第二夜には大天使ミカエルが使者を預かり、使者の生前の行為を秤にかけ、天国か地獄に行くかがきまる。石棺などを「ミカエルの馬」(Michaelis Pferd)と呼んでいる。かつては死者をヴァルハラに連れてゆくヴォーダンや白馬に代つてミカエルとなつたのである。

しかし馬は死とばかり結びついているわけではない。初夏になれば、風の馬が穀物の母 (Kornmutter) を乗せて麦畑を吹いてゆき、穀物が稔るのであるという表象をドイツの農民はひそかに信じて来た。それは天の女神フライア (Freia) あるいは天の主神ヴォーダンがこの世界に恵みを与えているというゲルマンの古い信仰に基づくものである。馬は祝福し、幸福をもたらす存在である。馬がひたすら走つて止つたところから、泉が湧いたとか、馬がひづめで蹴つたところから水が湧き、農耕が可能になったとか、鉄、銅、金銀などが発見されたという伝説が各地

にある。北欧の水神ネンニール (Nemir) は白馬にまたがって海から陸地に現われ、人間に幸運にもたらすという。また白い馬を飼っているとその家によい事があるとか、天の魔群から守ってくれと農民は信じて来た。

しかしゲルマン神話の衰退とともに、ウォーダン神や女神はデーモン化され、おそろしい嵐の様相だけが強調されるようになり、ついには中世では「天の魔群」や「夜の狩人」のような象象をとるようになる。したがって馬も異様な姿、たとえば首のない馬にヴォーダンは騎っていると、三本足であるとかいわれ、悪魔自身が馬に変身するという表現までとっていることもある。さきにあげたネンニールとは反対に馬が水中にはいり、水の精になるという伝説は、やがてスコットランドの湖沼に夜現われて泳いでいる馬の姿の水の精または水馬 (Waterkelpie) になったおもわれる。あるいは天の魔群の馬は魔女 (Hag) になるという。また天の魔群から馬の肉が空から投げ与えられることがある。この場合これを必ず食べなければならない。この肉は黄金にかわることがあるからだといひ伝える。このように民俗的な幻想からさまざまな象象をとり、おそろべきものとともに幸福をもたらすものであることも忘れていない。総じて現在のわれわれが知り得るゲルマンの古代の象象と思われるものは、すでにキリスト教文化の中で変様、変質化されている点に充分注意を要すると思われる。しかしたとえ断片的挿話的なものであっても、馬そのものを聖化し、霊獣化している傾向と、馬そのものの姿や特質をかりて聖なるものや霊的存在を表象しようとしていることは、デーモン化は別に、明らかに古代ゲルマンにおいて看取することができる。馬は死者、魂、神々など霊的な存在を騎せる重要な役割をになって来たという長い歴史があること、しかもこのことはなぜか世界において普遍的な現象であることにもわたしは注目したい。

冬至の犠牲獣について

冬至の祭には動物の犠牲が神々に捧げられたと記録は伝えている。バイエルン地方では仔牛、古代ゲルマンでは馬、雄牛をヴォーダンに捧げた。他の神々にはそれぞれに鶏、羊、山羊、鶺鴒、家鴨、鴨、鹿、猪等々時代、地域、部族によって定めがあった。大きなかがり火を焚き、新しい火のもとで、新しい太陽、新しい年を迎えるとき、犠牲を捧げたともいわれる。しかし時代がさがるにしたがい、牛や馬の犠牲は実際に行わず、木製の動物、藁で作った山羊や牛をもつてこれに代行した。これはキリスト教がはいつて来て、古いゲルマン、ノルマンの儀式が衰退していったからである。やがてヴォーダンの来訪を告げる宗教的行事として、白馬とともにヴォーダンの眷族である動物、植物に扮した行列の面々が仮面をつけて歩くようになった。炬火を焚く祭とならんでいつしか神々の来訪を告げる儀式や行進が行われるようになった。白馬にははじめ乗り手はいなかった。しかし白馬そのものが神の乗りものとして神聖視された。やがてヴォーダンの彫像を馬の背にのせるようにし、ついにはヴォーダンに扮した人間が騎ってゆくようにと変っていったらしい。このような神の行列行進をプロイセンやポンメルン地方では、「白馬の騎士」(Schimmel Reiter)という言葉はなく、ただ「シンメル」(Schimmel)と呼ぶ仮面行列の習俗としてのこしている。彼らは大きな巾広な帽子をかぶり、神に扮して馬にまたがる。民間伝承によると、ヴォーダンが長いつばの帽子をかむっているという表象は、この地方の風俗からいわれるようになったものである。神に扮する青年は、顔をかくし、見せないようにするとともに、白馬を大きく見せるためでもある。白馬の動作や振る舞いを見て、翌年の農作物の豊凶を占うこともあった。この冬至の祭に白馬(乃至馬、牛)の犠牲が古くは行われていたが、それ以外、春の祭、五月の祭、雹、雷を防ぐ夏の祭、秋の収穫の祭にも「白馬」^{シメル}を引いてゆく行事や白馬に騎士が騎っ

て行進する形体が各地に存続している。

他方十二夜の季節、メックレンブルク、ボンメルンでは「ヴォート」(Wood)、ヴォートク(Woock)と呼ぶ神々や精霊の一群が通過するという信仰があり、この群に「神々よ、恵んで下され」と叫び声をあげると、天空から大きな馬や仔牛の肉の塊りを投げ落してくれる。しかし不真面目に叫ばうものなら、その贈り物は日が経つと悪臭を放ついやなものになってしまう。他方真剣なものであれば、その塊りは黄金にかわるという伝説がある。伝説は伝説自体で発展することはあるが、古くは馬や牛を犠牲にして、神に献げたのち、肉の塊りを分ち与えた習俗の名残りであろうと推定される。古代ゲルマンの冬至の祭の習俗を中心にして、十二夜の行事が展開する。その中で一方は「白馬の騎士」の伝説となり、他方「夜の狩人」「荒々しき狩人」など、冬の劇しい嵐や雪の自然現象とヴォーダン神の祭の行列が精霊化、悪魔化され発展し、二つの異なる伝説が生れていった。

北欧の「ユル」の意味

北欧、とくにスウェーデン、デンマークから中欧にはいったと思われる言葉に、ユル(Yul)という言葉があるクリスマスの季節にこれはキリスト教以前から北欧において行われた祭の名である。今日では「ユルフエスト」(Yulefest)といえ、ユルの祭、すなわちクリスマスを表わしているが、それはユルをクリスマスと同一視するようになったのは、ユルの祭をクリスマスと同じ時期に行うようにハーコン(Hakon)王が命じたからである。かつては「ユルの月」(Yulmonat)と称して、第一のユルの月、第二のユルの月と呼んだ。前者が十一月、後者が十二月である。北欧で「ヨル」(Jol)、英国では「ユール」(Yule)とも変化して呼んでいる。「ユル」の語源はいまだに不明である。ヴァインホルト(Weinhold)はラテン語のユリウス(Julius)から由来した言葉で、真夏のユリ(Julii)

七月の光にみちた季節へ発展することを願って、真冬の十二月の冬至前後の月をかく呼んだのであろうと解している。他の説ではやはりラテン語の「ヨクルス」(Ioculus)に由来すると見るもので、ヨクルスは明るく楽しい祭の時であるように願ってこの語が訛ったものと見る。あとになって北欧の人々は「ユルの祭」を一月の三王礼拝(公顕節)後三日間行うようになった。

エーリッヒ・バイテル(Erich Beitel)の「民俗学辞典」(Wörterbuch der Deutschen Volkskunde)によれば、ユルは北部ゲルマン語の共通の言葉で、クリスマス、真冬期を現わし、とくに語源学者クルーゲ・ゲーツェ(Krüge Götz)の解釈では原型は、イエーヴラ(Jehwla)といひ、この語は「雪風の季節」を意であったか、原北欧語がフィン人やラップ人に取り上げられ、「祭」の意味に用いられたのであろうという。この古い伝用は真冬の祭のゲルマンの習俗がキリスト教化されていることを証しする。ユルの祭という用法はスウェーデン、デンマルクの宮廷で一三〇〇年頃からすでに記録されているという。

ヘルマン(Paul Hermann)によれば、ユルの語と同系と見做し得るイユルス(Uilus)、ゴート語のユエロ(Jeu-lo)などは、新しい、若い、新たに生れた、という意味であり、光の神、年の神を表わす別名であるともいっている。しかし別の研究者はユルはアングロサクソン語でフェオル(Hueol)のイングランド語でウィール車(Wheel)、フリースランド語でユーレ(Yule)は車を意味し、太陽の車、日輪の意味であるという解釈もある。事実、冬至の時期火をさかんに焚き、火の祭は、太陽との関係が強い。ユルの祭はさきにのべたようにラテン語のイオクルス(ioculus)、フランス語のジョリイ(Joli)、イエーヴェラ(Jehwela)のうつく喜びを表わす言葉ともいわれている。十二月には飼育していた家畜を屠殺して食べる楽しい季節である。インドゲルマン人は冬のさ中、太陽の光、自然の再生の祝いを行ってきたのである。

マルチン習俗再考

提灯行列

十一月にはいと、静かな温もりを見せた秋は一変し、北風が劇しく吹き、黄褐色の木の葉を空に舞い上げ、吹き落してしまい、暗い雲が押し寄せ、ときには小雪をちらつかせることもある。家鴨、鴨、鶩鳥などが一かたまりになって草地や小川にじつとかたまっている。夕方の日差しに小学校から帰る児童が大事そうにかかえているものがある。棒のさきに白い図工の紙で作った提灯らしきものが吊している。下宿の人がもう直ぐマルチン祭がやって来る、ぜひマルチン祭の提灯行列を見たいですと、いろいろ親切に教えてくれた。これがわたしがはじめてドイツの習俗と出会った最初の出来事であった。わたしが住んでいたのは、当時ボン市に隣接していたバート・ゴースベルク (Bad Godesberg) 市で、西ドイツの政府機関がボンであるとすれば、ここには各国大使、公使などの公邸の多いところで、もっぱら外交関係の施設が多かった。静かな住宅地であり、「バート」と呼ばれるように、鉱泉保養地でもあった。

十一月十一日、夕方五時あたりから高校生から小学生の少年、少女が提灯を持って集ってくる。やがて大人たちのブラスバンドがやって来る。五時二十分頃、行列を作って体列が動き出すとともに、ブラスバンドが太鼓やブラスを吹奏し、そのあとに少年、少女のコーラス隊が聖マルチンの歌を歌い、あとの年少の少年、少女がこれに倣って歌う。ほぼ行列の真中あたりに白のおおきな鶩鳥を少年たちがかついでいる。むろん張りぼての鶩鳥である。小学生、中学生、高校生のあとに幼稚園児や一団と両親に手をひかれ、あるいは抱かれながら小さい幼児たちがついて来る。むろん子供にふさわしい小さな提灯を手をしている。沿道にはこの行列を見ようとするとする人々がならび、窓

から身をのり出して見ている老人もあり、知り合いの者がいると、声をかけたり、呼び合ったり、提灯を振ったりする。この提灯行列に雪が降り舞い、その中にゆれる提灯はまさに幻想の世界であり、子供たちの歌う声は明るく元氣よく寒い冬の夜の中で新しい芽生えのようにひびきわたる。どの通りにもこの行列を歓迎し、一緒に歌う声もある。このようにして市の公園を抜けて市役所のところに行列は進む。そこには各地区からやって来た行列が行進してここに集ってくる。中世の甲冑に身をかためた聖マルチンが白馬にまたがり、お供の者と一しよに立っている。「聖マルチン！ マルチン様万歳！」といった声があがり、騎士マルチンの一行は歓呼の中に迎えられいよいよ本格的な行進が始まる。マルチンを先導するグループと、マルチンのあとに従ってついでゆく行列とが提灯を振って延々と町の大通りを練り歩く。アミアンの城門で乞食にマントとパンを与えたやさしい騎士マルチンを見つけ、教会へ案内するのである。この市で創立がもともと古いリュングスドルフ (Lungsdorf) の教会では、大きなかがり火を焚いている。古びた教会の塔が夜空に赤々と浮び上る。マルチンに扮しているのは、市長、助役などが多く、時には学校の校長もなることがある。マルチンは教会まで案内してくれたこと、古い木片れ、藁屑、その他不用のものを子供たちが集めて市中をきれいにしてくれたことなどを感謝し、来年はさらに躰けを守り、よい子になり、神の祝福を得るようにして欲しいと挨拶をして、子供たちにパン菓子を与え、子供たちは三々五々わが家へと帰ってゆく。

これで「マルチン迎え」の子供たちの行事は一応終るわけである。そのとき教会で今まで点していた蠟燭を消して、新しい蠟燭を教会でもらい、新たに鑽り出した主蠟燭の火を移しとり、これを点して帰る。マルチンは子供たちにやさしい恵み深い聖者であるので、この祭にちなんだ、家々の戸の前になつて、マルチンの歌を歌う。するとかねて用意していたお菓子、パン、果物などを紙に包んで恵むのである。マルチン祭は聖ニコラウスとならんで、

子供の祭でもある。あちこちで歌う子供の声に大人たちは、近付いてくるクリスマススの足音をさくのである。

バーデン州のフライブルク市近郊（現在フライブルク市編入）のホッホドルフは古いケルトの大きな遺跡の発掘されたところである。この村の教会は聖マルチン教会であるために、なかなか盛大におこなわれ、十一月十日幼稚園児を中心にした提灯行列がある。聖マルチンには女性（園長）が扮し、甲冑に身をかため、剣を腰に、外套を肩にかけ、馬に乗り、二人の侍者が槍と盾をたづさえ園児たちは両親につきそわれ、行列をつくってマルチン教会に赴く。この時司祭は子供たちを迎えて、マルチンの祭の意味を説き、この日のために作った「マルチンのパン」を子供たちはもらって帰る。翌十一日は小学生から高校生のマルチンの提灯行列がおこなわれ、つぎの十二日がたまたま日曜日の聖日であると、聖マルチンの守護聖者と仰ぐこの村の信徒たちの礼拝、ミサが朝行われる。しかし祭の日をレストランやゲステハウスなどで御馳走を食べ、夕方五時三十分頃ブラスバンドを先頭に村の大人、青年たちが、たいまつをかがけて主な街路をくまなく行進し、聖者の徳を讀めるのである。さらにフライブルク市東部のキルヒツアルテン (Kirchzarten) 市ではマルチンの提灯行列以外にアミアンの城門の寸劇を少年たちが演じている。チェコとの国境に近いバイエリッシャー ヴアルトのティトリング (Titting) でもマルチン祭に行列以外に「影絵」による少年たちのアミアンのドラマを演じている。

マルチン祭の習俗

十一月十一日のマルチン祭をもって大体中部ヨーロッパでは「冬の始め」と定め、秋の終り乃至は一年の終りとしている。古代ゲルマンにおいては確定的ではないが、この十一月十一日頃収穫祭がおこなわれ、天の主神ヴォーダン (Wotan) や女神フライア (Freia) に一年の収穫の感謝の祭をささげた。ケルト人も同じように収穫の祭 (同

時に新しい年を迎える祝い）を行つたようである。農耕生活は年間ほぼ同じリズムによって変化進行するのでこれが同じ時期に重り合うことがあつても異とするに当らない、一年間の終結と次の新しい年に向つての出発点となる日であり、すべての生活の転換点となる節目の祭となるのであれば、その重要性はおのづと明らかである。キリスト教が伝搬定着するとともに聖者という存在を介して新しい宗教的習俗が展開し、祭全体が別な意味と価値を加えていったことに注目しなければならない。

聖マルチンの生涯

聖マルチン (St. Martin) についてその生涯は概略的なことしか分つていない。しかし伝説的要素の多い他の聖者と比べれば、ヨーロッパ出生のこの聖者は歴史性が濃厚である。マルチンはパンノニア（ハンガリー）のサバリア (Sabaria) でローマ帝国の護民官の家に三一六年（三一七年説もある）生れた。父が皇帝の命によりバヴィアに護民官として赴任したとき、十五歳でローマ軍団の騎士として軍務に就き、コンスタンティヌス帝の近衛部隊に勤務した。のちにユリアノス帝に仕え、ガリア駐屯軍に勤務し、アミアン市に駐留したこともあつた。十八歳になると信仰上の理由で軍務から離れ、ポワティエの聖ヒラリウスから洗礼を受け、彼のもとでキリスト教の教義などを学んだ。故郷に帰って両親に改宗をすすめ、まず母親が信者になったという。異端アリウス派の勢力の強いパンノニア地方で布教伝道を試みるが、迫害を受け、そこでアンブロシウスと出会つたらしい。ミラノに引返した。ジェノアの近くのガリナリア島で隠遁生活をつづけた。三六〇年司教ヒラリウスが彼をポワティエに呼びよせた。三六一年にはリグージェ (Ligugé) にガリアにおける最初の修道院を創建した。三七二年七月四日マルチンはトゥール (Tour) の司教に任ぜられた。三七五年にはマルモティール (Marmoutier) に修道院を創立し、のちの修道院設立

の基礎付けを行った。トウルはヨーロッパ四世紀におけるキリスト教伝道の中心地となり、マルチン中部ヨーロッパの最初の修道僧になった。三九七年十一月八日、マルチンは没し、同月十一日トウルに埋葬された。マルチン祭はこの日に当る。彼の生涯についての記録はセフェルス (Seferus) の「マルチンの生涯」 (Vita S. Martini) やヴェナンティウス フォルトユナトス (Venantius Fortunatus) の「トウルの聖マルチンの生涯」 (Vita S. Martini Furensis) があり、ヤコブス・デ・フォラギネの「黄金伝説」 (Legenda Aurea) には多くの伝説、奇跡が豊富に記録されている。以上が聖マルチンの生涯の概略である。

マルチンの伝説と祭について

マルチンの呼び名はきわめて多い。その一部をあげると、Mart, Marti, Mertens, Martens, Maarten, Martino, Morcin, Martina 等々あり、子供を守護する聖者となったため、子供が親しんで呼ぶ呼び名がそのまま用いられているからであると思われる。マルチンにはつぎのような伝承がのこっている。彼がまだガリアの駐屯軍団の騎士としてアミアンに駐屯していたとき、雪の降る日、城門に貧しい乞食が飢えと寒さでふるえているのを見るや、すぐさま腰の剣を抜いて自分の外套を二つに裂いて、その一つを乞食に着せ、携帯していたパンを与えたという。すると夜キリスト者が集っていたところに一人の乞食が現われ、「まだ洗礼も受けていないマルチンが、わたしにこの外套を着せてくれた」といった。この乞食はじつは主キリストであり、まわりに天使たちがマルチンを讃美し、その歌声がひびきわたったという。キリストが語ったこの言葉をマルチンが夜夢の中できくという主題の絵画や彫刻が沢山ある。この愛に満ちたマルチンの徳を讃え、町や村の広場に騎士マルチンの馬上から乞食に外套を裂いて与える銅像を立てているところもある。アミアンの城門に見立てた町や村はずれに少年少女たちが提灯をふりながら行進

し、マルチンを迎え街や村をお練りをするのは、まだ洗礼を受けていない騎士マルチンを教会へ案内し、入信を祝う行事でもある。

マルチン祭の歌

このマルチン祭の歌はひじょうに多く、とくにラインラント地方のもだけでも、一冊の歌の本となす程作られている。その内容はマルチンの聖者の徳を讃えるもの、雪の中でマルチンを迎えに赴く行進の歌、提灯の歌などが主で、鶯鳥を歌ったものなどその種類はいくつかに分けることができるが、今でも新しい作が作られてまだまだ創作力は衰えていないのは、この祭にたいする庶民の興味と崇拜熱の強さを示している。まず広く歌われている「聖マルチン」の歌を掲げてみることにする。

一、聖マルチン、聖マルチン、聖マルチン、

雪と風の中すすんでゆく、

彼の馬は彼を軽やかに運んでゆく

聖マルチンは軽やかな心で騎っている、

彼の外套は温かく快よく彼をつつんでいる、

二、雪の中、雪のなか、雪のなか、
貧しい哀れなひとが坐っている、

衣服もなく、ほろをまとして坐っている、

「お苦しみの中のわたしを助けて下され、
さなければひどい寒さで死んでしまう！」

三、聖マルチン、聖マルチン、

聖マルチンは手綱をゆるめ、

馬をあわれなひとのそばにとまらせる

聖マルチンは剣で

温かいマントを即座に引き裂いた、

四、聖マルチン、聖マルチン、

聖マルチンはマントの半分をそつと渡した、

乞食はいそいで彼に御札を言おうとするが

聖マルチンは半分のマントのまますぐさま

馬をはしらせた、

この歌はラインラント州からはじまり、今日では一般に広く歌われているものであり、マルチンのアミアンの伝説を歌にしたものである。

一、かつて勇敢な騎士が馬に乗っていった、
あれこそ聖マルチン

かれは衣服を貧しい人に与えた、

聖マルチンに感謝しよう、

神はいつでもわれらに恵み深く助けをそなえて下さい
司教マルチンは、われらのために神にとりなし給え！

二、修道院で孤独に生きた、それが聖マルチン、

かれはキリスト者のために祈った、

聖マルチンに感謝しよう

結句前に同じ……

………

三、異教の神々を打ち破った

それが聖マルチン、

世界は主の光によって明るくなる

聖マルチンに感謝しよう

………繰返し………

.....

四、彼によって神は光と照り出る

それが聖マルチン

わたしたちのあかりも

夜を明るく照らし出そう

.....繰返し.....

.....

これは聖マルチンを讃える歌である。守護聖者にたいし、神への代願を求めている代表的なものである。つぎの
 ような親しみをこめた短かい歌もある。

マルチン、マルチン、

マルチンは信仰篤い人

彼のために火を点そう

彼は多くの善きことをなしとげた！

彼が外のものが見ることできるよう

彼のために火を点そう

つぎの歌は提灯を点しての子供の歌である。

ラテルネ、ラテルネ、太陽

月と星、燃えよ、わたしの光よ、

しかしわたしだけでなく

他の光も皆燃えよ、

これも提灯に火を点して行列作って歌う子供の歌でハンブルクで作詞作曲され、広く歌われている。提灯に太陽、月、星などを象って作ったものが多い。

ところが素朴なこの歌は作詞家の手が加わってさらに豊かな内容になってゆく。次の歌がそれである。

一、僕たちが提灯をもって家から出てゆくと、

天に星々があり、月が明るく昇ってゆく、

ラテルネ、ラテルネ、太陽に月と星、

僕のラテルネだけでなく

ラテルネみんなが明るく照らすがいい！

二、僕たちは手に手にラテルネ持って

夜をあざやかにとりどりに

もし蠟燭が消えたなら

家に戻ってゆきましょう、

ラテルネ ラテルネ 以下……

繰返し……

詩句を加えたのは、リヒャルトクライン (Richard R. Klein) でリフレインやメロディは民謡調である。

一、マルタインはいいお方、

さあわれらを喜ばせて下され

今夜あなたの名譽と

あなたの意志によって！

あなたは驚鳥を多くし、

おいしいワインもふやして下され、

すべてを煮たり焼いたりしたいもの、

これは一四〇〇年頃オーストリアで歌いはじめたものといわれている。マルチン祭の夜、新しくできたワインを味わい、驚鳥その他を料理して食べる。その喜びを素朴に歌っている。

マリアの光のミサ

二月二日の「マリアの光のミサ」(Maria Lichtmeis)の祭は、現在は市民が蠟燭を潔めて行進するような盛大な行事は行わなくなったが、教会の中で蠟燭を沢山に点して厳肅にミサを守っているところは多く、もっぱら少年少女たち(あるいは青年たち)の行事となっているようである。この「光のミサ」という祭は、複雑な要素から成り立っているように思われる。それを明かにしてゆくことが当面必要である。まずはじめにこの光のミサの日に唱える子供の祈りから見てゆくことにする。

おお神よ、わたくしたちはあなたに感謝します！

人間のよき友であるイエスを

あなたはわたくしたちにおくって下さいました

イエスは全世界にとって大きな光です！

主よ、あなたはすべてのものに喜びを与えてくれます！

あなたは全世界にとって大きな光です！

十二月二十五日のクリスマスに誕生を祝ったイエスは、四十日目となり、母マリア、養父ヨセフにともなわれ、ナザレからエルサレムに神殿詣でをする。「母の胎をはじめて開く男の子は、みな主に聖別される者として」詣で

るのが、イスラエルの律法の慣わしであった。ヨセフは山ばと一つがいを持ち、犠牲をささげるべく、マリアは幼児イエスを抱き神殿にすすみでた。(ルカ二ノ五—三二) マリアはわが子を神にささげるべく悲壮な決意を示したのである。そこにシメオンという信仰深い老人に出会った。彼は救世主に会うまで死ぬことはない聖霊の告知を受けていた。シメオンはイエスを腕に抱いて神を讃美して歌った。

主よ、み言葉のごとくこのしもべを

今安らかに去らせてくださいます、

この目はあなたの救いを見た

この救いは万民のために備えられたもの、

異邦人を照らす啓示の光

民イスラエルの榮光である (ルカ二ノ二九—三二)

さらにマリアにもつぎのようにシメオンは告げる。「見なさい、この幼児はイスラエルの多くの人々を倒れさせ、立ち上らせるために、反対を受けるしとして定められている。あなたも剣で胸を刺し貫かれる——多くの人々の心の想いが、あらわれるためである」(同二ノ三三—三五)。この老人の予言ともとれる言葉は、同時に多くの人々の心の想いの成就でもあった。この二月二日を「光のミサ」と呼ばずに、今日では教会では「主の御現まゐわし」と呼んでいる。幼児イエスが世の救いの光であることが、シメオンをとおして現われたのである。イエスの存在はマリアと天使の間や聖家族の中だけでなく、このシメオン以外に神殿にいた女子言者、アンナにいたるまで知られ、明

らかになったのである。(同二ノ三六―三八)。

むしろはじめは産後の潔めのためにユダヤの律法の定めるところに従って、マリアが神殿に詣でたことを祝う祭であった。この「光のミサ」はエルサレムでは四世紀頃から行われた形跡がある。皇帝ユスティニアヌス一世は紀元後五四二年ビザンツでこの祭の日を定め、カトリックでもこれにならって行うようになった。古い祭の行事から蠟燭を点しての光の行進を行ったらしい。

二月の潔めの習俗

古代ローマの暦では二月 (Febracio, Februar, February) は元来一年の最後の月であり、生活上の大掃除、古く腐れたもの、汚れたり、不用になったものを燃やしたり、洗い潔めたりする。同時に人間も身体を改めて潔める習俗があった。したがって元来潔め (febracio) の月であり、潔めをすませて新しい年の春を迎えた。東方教会ではキリスト誕生を一月六日に祝うので、二月十四日ヴァレンタインの祭がマリアの光のミサとなる。この日はローマの主神ユピテルの后にあたる女神ジュノーの大祭の日である。ローマの人々は神殿に花を供え、火を点して祈願する。また二月十三日はファウナの祭といってファウヌス (Faunus) という半人半山羊の生殖、豊饒の神を祭り、これにあやかって人々は原野、森の野生の荒々しいデーモンとなって歌い狂乱舞踏する。また二月十五日にはルペルカリア (Lupercaria) の祭がある。山羊 (または犬) を犠牲にささげ、剥いだ生皮を祭の若者 (神人) がかぶり町を走って、膚を出している女性の背中や手を叩いて祝福する。「ルペルカリア」とは「山羊によって潔める」 (luere per caprum) 意であるという解釈がある。他の説では「狼」 (lupus) の害を防ぐものであったともいわれるが、いずれも確たるものではない。未婚、既婚を問わず、女性の身体を叩いたり、触れたりすることによって、災

いや病気を防ぎ、子供が授かるとか、出産、子供の生長を祝う行為とされた。山羊は多産、繁殖の象徴としていることは、ギリシア、ローマ、ヨーロッパでは共通である。

さらにこの二月には「アンブルビウム」(Amburbium)といって、新年(ローマはマルスの月が正月)を迎える準備として潔めの行事が行われた。さきに述べたように市全体の潔め、教会の潔めがあり、羊、牛、豚などを犠牲としてささげ、一年間の贖罪を行い、城壁、都市の教会に火を点して行列をつくって行進した。この行事は皇帝ヌマ(Numa)の治世に定まったといわれる。このようなローマの祭と習俗の中にあつて、キリスト教はローマ文化の二月の潔めの行事を受容しながら、「マリアの光のミサ」のような祭へと昇華していった。ユスチニアヌス一世が国家的に制定するより前、四九四年法皇ゲラシウス一世(Gelasius)がこの祭を定めて以来新しい方向を取るに至つたのである。このマリアの光のミサを柱として二月一日が聖女ブリギッテ(Brigitt)、二月四日が聖女ヴェロニカ(Veronica)、五日が聖女アガタ(Agatha)の祭の日であり、六日が聖女ドロテア(Dorothea)、九日が聖女アポリニア(Apolonia)、十六日が聖女ユリアナ(Juliana)、十七日が聖マリアンヌ(Marianne)、十九日が聖女スザンナ(Susanna)、二十一日が聖女エレオノラ(Eleonora)の日となっているように、殉教聖女たちをこの二月に列して女性の宗教的な徳を讃え、その価値を高めようとしている。それゆゑ二月は潔めの月であると同時に、「女性の月」(Frau Monat)でもある。

この二月(潔めの月)には、つぎのような祈りがある。

クリスマス期は終り、

最後にわれわれは

蠟燭に日を点す。

異邦を照らす光を

われわれは歌います。

祖父母、父母、子供たち

三代が教会で出会います。

年寄りも若い者も除外されません

神殿で自己の権利を主張して

ただこのしるしを拒む者だけが

排除されます

クリスマス期の光とともに

われわれの信仰が

消えないように祈ります。

光のミサに蠟燭を点して行進する行事でも、教会のミサでも歌われるこの祈りの歌は、この二月全体にわたる潔めの祭の意味を適切にいい表わしている。光のミサの行進のとき、つぎのような歌を歌う。

神殿に杖をついて

老いたシメオンがやって来る、

聖霊の賜物により

彼の心は歡喜に満されている、

彼はわれらに救いをもたらしものを

自分自身で見るまでは

死を味わうことはない。

シメオンは幼児を見、

喜びに燃えて幼児を胸に抱きしめる

イエスの眼ざしから

きよらかな天の喜びがかがやく、

喜ばしき顔をした

子供を嬉しげに抱く

放虔な老人を見て下さい、

彼が語るのを聞いて下さい、

「主よ、この高齢で

平和のうちに

私を祖先のもとゆかせて下さる

喜びにみち彼らのそばに安らわせて下さる

高いところから

盲目の異郷のものに光が昇る

わたしはその救いを見た」と。

このようなよき想いは

彼に甘美な安らぎを与えた

信仰深い信頼をもつて

彼は眼を閉ざした。

ああ、主よ、わたしの終りにも

このようであり、

あなたのもとに導く

天使をわたしに送って下さい！

この歌は老人シメオンを歌いながら、幼児イエスの救いの光を見、シメオンの信仰に祝福の典型をよみとろうとしている。つぎは「光のミサの歌」と称して、領主、司祭、貴族、市民、手工業者、農民等々階層に応じてそれぞれがこの日を祝う歌があり、町や村の男女の青年たちは家々をまわって古い蠟燭を集めながら、このような歌を一日歌って光のミサを祝うのである。

さて皆さん、御存知ですか、

わたくしたちは聖ドロテアに仕える者です、
神の奉仕のために

美しく燃える蠟燭集めをしています、
わたくしたちは蠟燭やあかりを集めます
すべて神の榮譽のためです、

某々が蠟燭のために財貨を施し、
謙虚にきき入れるよう願っております、

蠟燭のために財貨を施す人に

主なる神は天国を与えて下さいます、

……

礼拝のとき美しく燃えるように、

わたくしたちは立派な蠟燭をつくりたい、

おそらく礼拝のときも、ミサのときも

よく燃え、最高のものとなる蠟は

キリストの信仰を意味し、

神とマリアがわたくしたちを支えてくれます！

芯はいつでもわたくしたちを保つ

よき希望を意味します

蠟燭が明るく淨く燃えるのは

愛がわたくしたちに消えぬことを意味します

蠟燭がつつましく清く燃えるのは、

それが神の聖体を美しく照らすからです、

蠟燭はよく燃え

神がわれらを地獄の苦しみから守ってくれます、

地獄の苦しみ、地獄の火から

神はわたくしたちすべてをかばってくれます！

このように唱えると、蠟燭を寄謝する家があると、これにたいし青年たちは幸福が宿り、災いが切妻から外に出て、神の祝福が一年間この家にあるようにと、感謝の歌を歌ってつぎの家を訪ねるのである。

蠟燭の潔めの習俗

さきに述べたように、使い古しの蠟燭や蠟を家毎に集める行事は、青年たちのつとめであった。のちに少年、少女が行うようになるが、とに角昔は蠟は生活必需の材料であり、貴重な存在であった。電気や石油ランプ、ガスランプが用いられる以前は唯一の照明であった。教会、御堂はむろんのこと、各家庭は蠟燭を用意していなければならぬ。男性が用いる蠟燭は白、女性は赤である。家畜のためのもの、やがて訪れる復活祭のためのもの、洗札や

贖宥いに用いるもの、あるいは害敵や悪魔などが近付かぬよう死者の枕許に点すもの、病床にある人のために点すもの、荒れ狂う風や嵐の夜に点すものなどを、家の主人はこの光のミサに潔められた蠟燭を一年間保存しなければならぬ。蠟燭はわれわれが想像する以上、あるいは忘れてしまいたい思い出せない程、生活の中にはいつており、人間の意識の奥の襞をも照らす微妙なニュアンスを持っている。赤い蠟は女性以外に、教会で嘆きを示すとき、十一月三日、万霊節のとき練獄にいる者の淨罪火として点す。とくに黒い蠟燭 (Schwarze Wexkerze) は雷鳴、電光の激しいとき、雹、霰が降って来るようなとき、点して家や畑を守ってくれるように祈る。とりどりの色の蠟燭を、教会に持って来て、潔めてもらい、普段使いの他の蠟燭と区別し大切に保存する。ヨーロッパで養蜂業が盛んなのは、蜜蠟を採ったからである。この光のミサの日蜜蠟の市が立ち、農家の人々は蜜蠟を売り、新しい蠟燭を手に入れた時代もある。

この光のミサの日を春の到来を祝う最初の日として、パンの上に蠟涙をたらしたり、家畜小屋の戸口や牛羊にもこのパンを他の飼料に混ぜて与えたり、鋏、鎌、犁、軛などの農具、石臼、帽子などにも蠟を滴らせ、祝福のあるように念ずるのである。

光のミサの節目

このマリアの光のミサの日をもって下男、下女、作男、作女その他雇われ人の出代りの日となっている。オーバーバイエルン (Ober-Bayern) 地方では *Gewinn* のように歌っている。

今日はよい日、

皆が歌います、

明日は光のミサの日、

わたしたち旅立たねばなりません

ヴァルデンブルク (Waldenburg) ではつぎのような歌がある。傭われた男女にとって故郷のわが家へ帰れる喜びの日である。

今日は楽しい光のミサの日、

明るく元気よく、

わたしは衣服を荷造りし、

テューブルのうしろに置く、

ああ、お内儀さん、財布をこちらに下さいな、

農家の旦那さん、お拂い下さい、

あなたがたはよくスープをこしらえたが、

わたしにはたつぷり飲ませてもらえなかった

わたしはよく働いたつもりだが、

あんまり気に入らなかったようですね、

預っていた財布を返してもらい、いよいよ約束の賃金（給金）をいただく日である。スープを充分飲ませてもらえなかったのは、事実をいっているのではなく、こんな冗談を交わし合う日なのである。

これにたいし、雇い主の農家の主人、主婦の側からつぎのような返歌を歌い笑い合う。

光のミサがやって来ると、

わたしの心は重くなる、

お金を渡さなければならぬ、

光のミサがなければなあ！

光のミサの日は春の到来を告げる節目の日であり、次のような諺詩が伝えられている。

光のミサよ

紡ぎを忘れよ！

紡ぎ車は戸を奥にしまえ、

犁をここにとり出せ！

農家の女性たちはいよいよ麻や木綿の糸を紡ぐ冬の仕事を止めて、畑仕事を始める区切りの日でもある。「マリアが蠟燭を消し、ミカエルが蠟燭をまた点す」という古い諺があるように、九月二十九日ミカエル天使の日は冬に

はいる節目の日、二月二日光のミサは夏に向う節目の日である。古くからの民間信仰によれば光のミサとともに太陽は飛躍するかのように光を増し、夕方も蠟燭なしで夕食を取り、仕事もつづけられる。今日では電灯の時代であるが、テーブルにわざわざ燭台を置き、春の象徴のごとく、点っている蠟燭の火を吹き消す家庭もある。この日にはクリスマスと同じようにさまざまな占いも行われる。当然農事に関わるものが多い。

光のミサが明るく澄んでいれば

よいロッゲンの年となる

諺詩は地方によっていろいろ異なる表現、いい回しがある。農民の間の言い伝えの中には、光のミサの日にアナグマ (Dachs) は冬の棲家を去ってゆくが、日の光とその影を見て、再び穴に戻る。まだ四十日は寒いからだという。春を待ち望む人間には、少しでもその萌しを見つけようとするが、自然に随順する動物達は、一度は目を醒しても、しばらくじっと待って冬を過ごすのである。

マリアのシャンデリア

古代ローマの二月、潔めの月 (Februa) は一年間の罪を潔めるために、さまざまな祭があり、とくにたいまつを点して行列を作り市を練り歩く習俗があった。のちにキリスト教化がはじまって、この習俗を廃止せず、五世紀の終り頃にはキリスト的な蠟燭による光のミサ、光の行進に変容した。その他山羊、犬その他の動物を犠牲にして罪を償うローマの祭を止め、蠟燭をささげ、潔める行為に改めた。ローマ的な自然的なけがれ除去の方法を中止

し、精神的な内容のものに昇華させた。本来の「光のミサ」にはこのような異文化との接触対立にたいして、これを変容克服する問題があった。しかし今日ではマリアの光のミサと呼ばず、幼児イエスはじめて公けの神殿に赴いたこと、しかも救いの光がシメオンの言葉を通じて明らかになったことに重きを置き、「主の御現わし」というようになった。

ドイツのニーダーライン (Niederrhein) 州のエルケレンツ (Erkelenz) 市は、鍛鉄、鉄工芸のさかんところである。ここにはカトリックの聖ランベルトス (St. Lambertus) 教会がある。ドッペルマドンナ (Doppelmadonna) といって、表裏同一の聖母子像が祭られている。ここにはマリアのシャンデリアと称する見事な作品が教会の祭壇の前の天井から吊り下がっている。マリアはヨハネの黙示録に書いているように、太陽を衣としてまとい、月を足に踏み、十二の星を王冠にいただくマリアが幼児を抱いて立っている像の下に、七つの燭台が四方に枝や蔓のように延び、シャンデリアを構成している。葡萄のように渦巻く曲線をえがいてアカンサス風の葉が茂り、燭台を飾る。予言者と天使がならび、キリストを象徴する大きな葡萄の房が垂れ下っている。華麗な真鍮の黄金の輝やき、太陽の光焰と相俟つていやが上にも聖母を讃美して止まぬようである。とくに二月二日、光のミサの祭には、このシャンデリアに大きな蠟燭がすべて点り、祭壇はいうまでもなく、教会の入口、柱、窓にも蠟燭を点し、その光の海の中で人々は手に蠟燭を持ち、マリアの讃歌を歌う。まさに蠟燭の火、またき、ゆらめく光の花園の中でマリアのシャンデリアは最高の輝きの中に燃えるのである。これに似たマリアのシャンデリアはクサンテン (Xanten)、カルカール (Kalkar) など金属工芸の旺んなニーダーライン地方に多い。自分達の職業の技術を最高に発揮しながら、聖母の愛をたたえ、光のミサを讃美して止まないものである。

二月三日 聖ブラジウス

光のミサの翌日二月三日は聖ブラジウスの日である。聖ブラジウス (St. Blasius, Blaise, Biagio, Blasco, Blas, Vasco) という聖者について二説あり、ディオクレティアヌス帝のキリスト教迫害に際して二七八年殉教を遂げたという説があり、少し後の時代、リキウス帝のとき、三二六年殉教したという説もある。この聖者は十字軍の頃ヨーロッパへの聖遺骨^{レリキエ}がもたらされ、その後急速に崇拜が広まった。ブラジウスの日が定まったのは、十六世紀中世後期であり、彼の生涯については伝説^{レジェンダ}が幾重にもまつわっている。しかし大よそ知られているところを述べると、彼はアルメニアの人で、はじめ医者であったが、のちにアルメニアのセバステ (Sebaste) の司教となった。はじめ皇帝の迫害を逃れ山の洞窟に隠れたとき、彼を慕う鳥が食物を運び、野のけものたちが親しく近付いてきた。ブラジウスは怪我をしたけものを癒したので、沢山のけものが彼のもとに集って来、獵師は狩獵ができなかったという。しかしキリストは彼は殉教のときが来たことを告知した。彼は洞窟を出てゆき、捕えられ、総督のアグリコラの前に引き出された。キリスト教からの改宗を迫られたが、拒否したために牢獄に投ぜられ、鉄の羊櫛で皮をひき裂れ、最後には刎首刑を受け、殉教したと伝える。牢獄にいながらブラジウスは喉に棘の刺った子供を治癒したとか、さまざまな病気をなおしたとも伝える。ペストの守護聖者となり、十五世紀には十四人の救難聖者の一人に加わった。羊櫛との関係で羊毛関係の職業のバトロンにもなっているが、何といってもブラジウスは、喉、頸の病いを癒し、守る聖者として知られている。

現在教会で行われている聖ブラジウスの祝福は、二本の蠟燭、あるいは二本の棒をアンドレアス型十字に交差しこれをしつかり結び合せ、蠟燭に火を点し、これを信徒の頸にはさんでつぎのような祈りを唱える。

司教にして殉教者 聖ブラジウスの取りなしにより、すべての頸の災い、その他の害より主はあなたを癒し守り給わんことを！ 父と子と聖霊の御名によりて、アーメン

本来頸の病氣や災いの守護であつたが、数百年の経過とともに、咽喉炎、咳、小兒病、齒痛、頭痛等々にまで広がるに至つた。この蠟燭の潔めを「ブラジウスの光」(Blaslicht)と呼んでいる。イギリスでは齒痛のとき、際壇で潔めた蠟燭を齒やあごに当てる風習があつた。腫瘍、疳痛のときも、ブラジウスに助けを求めて、蠟燭の火を隨時用いるところもある。また牛、羊、豚など家畜の病氣にたいしても、蠟涙を滴らせて潔めを行う。この蠟燭の火による潔めは、二月二日のマリアの光のミサとのつながりによるもので、二月三日に行うところはごく稀れで、現在ではマリアの光のミサのときに、ブラジウスの光として十字形の蠟燭を信者の頸やあごに当てて祝福を与えている。それゆえこの習俗は二月の潔めの行事の中で病氣を癒し、病氣その他からの災いを防ぐものとして発展した習俗であると考えてよい。聖ブラジウスあるいは「ブラジの火」は、光によつて病いや災いを「吹き消す」(blasen)意味もある。英語でもブレイズ (blaze) は焰、光の輝きによつて聖者の名を呼び、その守護を仰ぐ慣わしがある。聖フィンツェンツ (Vinzenz) (ヴァインセント・ヴァンサン) はワインの守護聖者の一人に仰がれているが、その根拠はワイン (ヴァイン Wein) との言葉の類似現象によるものと思われる。ブラジウス、ブレイズの場合もこれにきわめて近似している。

また「ブラジウスの水」(Blasius-Wasser)といつて、二月三日に教会で潔めた水を牛、羊、豚、ひな鶏、鵞鳥などの家畜にふり撒いてきよめを行い (Benedictio salis et aquae indio Sui Blasii) と唱えて病氣や災いのないやうに祈る習俗もある。イタリア、ビザンチンでは狼より牧人を守る聖者として崇拜されていた。また昔はこのブラ

ジウスの日にはアガタと同じように有害小動物、害虫の類いから畑を守り、人間や家畜を病氣から守るために、潔めたパンを人間や家畜が食べ、畑に撒いたといわれており、頸にはれものができたり、痛みが生じたとき、ブラジウスの日のパンを細かに砕いて食べたという。察するにアガタのパンの潔めに統一される前にはブラジウスもパンの潔め、食物の潔めを行って来たのである。民間語源に基いて聖ブラジウスは吹く (Blowing) 用具、装置などたとえば風車、吹奏楽器の奏者の守護聖者である。二月は風が激しく吹くために、このブラジウスの日に塩、麦粉、灰を風に向ってまき散らすと、風が鎮まるとベーメン地方ではいい、エストニア人はこの日漁に出ず、海に船を出すと不幸があるといつて禁じている。一種の忌みの日となっている。早春を予感させるという意味でマリアの光のミサの日と同じように、天気占いの日でもあった。「聖ブラジウスは冬を終わらせる」とか、「ブラジウスとウルバンに雨が降らなければそれはよいワインの祝福である」などの諺も生れている。ある地方ではこの日の夕方古い蠟燭集めで家々をまわるところもあり、この日の夕方に同業のツンフトが集って食事をするところもある。「救難聖者ブラジウスの歌」がある。つぎはその一部である。

聖ブラジウスよ！

迫りくる悩みのためにあなたに叫ぶ、

苦難の助け手よ、われらの声をさき給え、

あなたの祝福がやさしく流れでて、

われらを守り、家々をかばって下さい！

おお天の広間から地上の谷を見下して下さい！

聖ブラジウスよ！

あなたの姿から閃きが明るくかがやく、

偉大にしてやさしく聖なる司教よ、

二つの蠟燭があなたの手に燃え、

苦しみは切にあなたの外套にすぎる、

あなたの心はあわれみにみち、

助けを示される、

あなたは信仰の英雄として血を流し、

われらに光を示された、

聖ブラジウスよ！

われらがあなたにつき従うことができるよう

われらを強くして下さい、

われらがキリストに誠実に告白し、

岩のごとく信仰に堅く立ち

誤まりのなきように歩ませて下さい！

.....。

アガタの日

——ミューレンバッハのパンの潔め——

マリアの光のミサ（二月二日）につづいて、二月五日は聖アガタの日である。聖アガタ（St. Agatha）はシチリア島のカタニア（Catania）の貴族の美しい娘であつたといわれ、総督の求婚を拒けた。彼女がキリスト教徒であることを知り、皇帝デキウス（Decius 249-251）に訴え、改宗を迫つたが、その信仰を棄てないので、さまざまの拷問を受け処刑され、殉教を遂げた。アガタの死後一年目にエトナ火山の熔岩が大量に流出し、カタニアの町を襲つた。アガタの墓から碑文を取り出して熔岩に向けると、流れが変わり、火山は鎮まつた。その碑文には、「彼女は精神の一瞬の救い、神の栄光、国の救いに達した」（*Mentem sanctam spontaneam, honorem Deo et Patriae liberationem*）と誌されていた。シチリアで聖女アガタ崇拜がおこり、彼女は教皇シマッコス（Symmachus 498-514）によつて聖者に列せられた。アガタは火山の危険、雷鳴、電光、火事、火に関わるものの守護聖者となつた。

中世にはこのように聖アガタに取りなし、代願を願つた。火の守護からさらに発展して人間や家畜が病氣なり熱病に犯されたとき、守ってくれるように祈つた。現在もアガタの蠟燭（*Agathenkerzen*）、アガタのパン（*Agathabrot*）、アガタの護符（*Agathenzettel*）などが奉獻されており、民衆の間では「火の乙女」（*Feuermagd*）と呼んで親しまれている。

ミューレンバッハのアガタのパンの潔め

シュヴァルツヴァルトの奥の谷間にミューレンバッハ（*Mühlenbach*）という閑静な山村がある。二月五日、アガ

タのパンの潔めが行われるというので、二月四日夕方ミューレンバッハのガストハウスに一泊した。潔めのミサは五日の早朝四時半に始まる。ミューレンバッハの聖アフラ監督教会に赴くと、人々は老いも若きもこの村特有の民俗衣装を着てわが家のかまどで焼いたパンを携えて、教会の祭壇の前の机に並べている。この日の主役は華やかな民俗衣装を身につけた村の十二歳以前の少女たちである。ミサとともに大きな皿の上にパンを乗せ、祭壇に献げる。老司祭や助祭とともに村の少年たちもこの日のミサに蠟燭をかかげ、香をふりまく。讃美歌、祈り、朗唱などのあとに、主がアガタをとおして、献げた各家のパンを潔め、祝福を与え、さまざまの災いや害悪から守ってくれることを祈願する。それぞれ大小のパンの上には小学校、中学校で少年、少女たちが聖アガタの代願の唱え詞がハート型のさまざまの画用紙の上に、「聖アガタよ、電光、雹、火事よりわれらを守り給え！」と書かれている。これを持ち帰り、家の扉に貼っておき、一年間の無事を祈る。火事はもとよりのこと、雷、雹は農民にとっておそろしい災いである。チロル地方の教会ではつぎのような護符^{ツェツデル}をミサに着た村の人たちに渡し、家や家畜小屋に貼っておく。その言葉はつぎのような莊重なラテン語である。Domine Jesu Christe per b. V. M. Agatham benedic et sanctific hos panes et exingue ignem comburentem! (おお、主イエス・キリストよ、祝福の処女にして殉教者のアガタによりて祝い、このパンを潔め焼きつくす火を消し給え!) 少女達はパンを家に持ち帰り、この潔められたパンを家族が食べて新しい春を迎える喜びを分かち合う。パン屋とか鍛冶屋、その他農家ではわざわざ司祭に来てもらって、かまどやふいご、火を用いるところを潔めてもらうところもある。まだ暗い五時頃から村全体が行うこのパンの潔めのミサは、厳肅な気配の中にも寒さはつづくが、春の到来をうかがわせるものである。アガタのパンを家畜小屋に持つてゆき、牛、馬、羊、あるいは鶏、鴛鴦などに飼料に混ぜて食べさせ、無事生長を祈る。あるいは家の部屋、家畜小屋の隅にパンの小片を置いたり、畑に撒いて祝福、豊作を祈ったりする。とくに畑を鋤きはじめるとき、馬にこ

のパンを食べさせる。

教会の潔めのミサのとき、点された火を蠟燭にうつして家に持ち帰り、物故者、祖先のため、家族のために祭壇に供える。この時、蠟燭が倒れると不幸があるとか、たてた人がまっ先に死ぬといわれる。この日に教会で燃した薪の灰を穀倉や家畜小屋に運び、畑に撒いたり、飼料にパンを同じく混ぜ合せると豊作になり、家畜が病気になるいといって行うところもある。また蠟の雫を羊飼いのズボンに十字型にたらしめておくは無病息災であるという。ウェストファーレン地方では、家畜小屋の戸に蠟燭を点す。この行為だけでも春の近きを感じさせる。これは二月二日の光のミサにつづく燭火の習俗ともいえる。このアガタの日には故郷を離れて勉強につとめたり、仕事を習っている若者のもとへも、親から届けることもある。故郷からのパンは、故郷や家を偲ばせるとともに、遠くにいる者をも悪霊や災い、病気などから守ってくれるものと信じられている。

なおアガタ聖女についての伝説の中に、彼女のヴェールをひろげたところ、熔岩の流れが止まり、カタニアの町が救われたといわれる。一六七四年の火山の爆発の際も、アガタに祈って熔岩を防いだ。またいく度か火災、地震、ペスト、飢饉などからも救ったといわれる。アガタ以前にシチリアにはアガトス (Agathos) とか、「ボナデア」 (Bonadea) といって病気や災いから人々を守り、幸運を与える女神が崇拜されていたと推定されている。おそらく聖アガタはその先行の女神の特質を受け継ぎながら、キリスト教的に新たに発展していったものと思われる。南ヨーロッパの女神的なものが、アルプスを越え、中部ヨーロッパにはいつていったとき、意味と内容が変容され、新しい習俗が展開していったよき例である。

二月十四日 聖ヴァレンティンの日

ヴァレンティン (Valentin, Valentin, Valentino) という聖者は、少くとも三人の同じ名の聖職者がいて、その集合のもとに、一人の聖者像が民間において崇拜され、さらにさまざまな習俗が生れたと見ることが出来る。一人はテリニイ (Terni) のバレンティンといい、ローマで僇^{せむし}癩の子供を癒し、二七〇年頃刎首の刑を受け、殉教したと伝える。他はアステリアと呼ぶローマの判事の盲目の娘の眼を治癒させたという司教で、捕えられ、二八〇年頃斬首を受け、殉教したという。ところが民俗的に熱心に崇拜を受ける動機となった聖ヴァレンティンはレティーエン (Ratisien) 地方で放浪司教として福音を説いた聖者であり、四七〇年頃メラン (Meran) で没したと伝える。七三九年彼の聖遺骨がトリエントにもたらされ、さらに七六一年バイエルンのタッシロ (Tassilo) 大公によってドナウ河畔のパッソウに祭られるようになって以後、この聖者の崇拜が中部ヨーロッパに広まった。ヴァレンティンは子供こどもの癩癩かかや尪^こ癩病を治癒したために、膝に子供を抱いている姿で図像では表わしていることもある。病気の治癒の聖者としては聖ブラジウスその他の聖者と共通する。したがって人間のみならず、家畜、養蜂の守護聖者ともなっている。このように幾人かが聚合して民間では一つのヴァレンティン像が形成されていったのである。

さきにマリアの光のミサでふれたごとく、二月十四日はギリシア正教 (東方教会) では一月六日に祝うクリスマスより数えて丁度光のミサに当る日であり、これを祝い祭が盛大に行われた。しかも古代ローマにおいては太女神ジュノー (Juno) の祭の日になり、新婚の夫妻とか、家庭を持つ人々が家や夫婦の守護願って神殿に詣で花を捧げた。それだけではなく女性たちは家族内で花の贈物受け取る風習があった。このような習俗は、春を迎えるにあたって、ヨーロッパのキリスト教文化の中で無条件で受容されていったのである。カトリック文化圏では、十二月二十

五日がクリスマスで、二月二日が光のミサを祝うと決っているから、ヴァレンティンの日はこの聖者の名のみ残すことになった。北ドイツのハンザ同盟の海港諸都市の船員、貿易商、手工業、組合ゾアその他の協会では、このヴァレンティンの日を期して、一堂に集合し、親睦をかね、仕事の上の協調などをはかり、夕食宴会を行う慣わしがある。長い冬を経ていよいよ活動の準備をするためである。

チロール地方ではヴァレンティンをペストや癩癧の守護聖者として崇めながら、この二月十四日を一年の内でもっとも不幸な日（不吉な日）と昔から見做して来た。その理由は明らかでないが、ヴァレンティンとファレン（*Fallen*、倒れる）との民間語源説に由来するという説がある。チロール地方ではまだ厳冬のさ中で雪崩やその他の災害の多いことも含まれているかもしれない。しかしかえって不吉を転じて幸運を求める日になってゆく態度も生ずることになる。それだけではなく、桶屋、樽屋はこの日を期して桶樽を作りはじめるので、盛大に祭を行う。謝肉祭（ファスナット）のさまざまの団体もこの日を期して前景気をつけるべく、舞踏会を行う慣わしもある。

しかしヴァレンティンの日は、愛を語る日、恋の占いの日として若い人々が待望することでも有名になった。この日を「恋の日」（*Liebestag*）といって、雪に埋もれながら、緑の葉や芽をつけている野の草を「恋のサラダ菜」といって摘みとり、スープ、サラダにして食べる。ヴァレンティンがローマの判事アステリアの娘の盲目を治癒する奇跡を行ったが、そのとき娘に「あなたのヴァレンティンより……」という手紙を書いたという伝説がある。それにちなんで愛する相手に手紙を出す守護聖者と見做された。また花束に「聖ヴァレンティンに花を贈ります」と書いて、相手にプレゼントする。「赤い薔薇をあなたに！」とか「青い堇をあなたに！」といったツェツテルを添えて贈る。これはまだ親しい間柄でない場合は、そっと知られないように、窓側にあるいは玄関や門に挿すこともある。英国あたりから広まったのは、ハート型の図柄のカードを送り合ったり、ハート型のケーキを焼いて相手に贈ったりす

る。これらはすべてローマ時代の女神ジュノーの祭以来の習俗をヨーロッパ人も継承しているといえる。丁度この二月十四日頃になると、中欧ではクリスマス以来激しく吹き荒れた嵐も、雪も止んでみ、晴れ間の日があり、春の到来を感じさせる。この頃になると、野の鳥も番いになって飛ぶ姿を見かける。冬から解放され、若い男女が愛を語り、想いをよせようとするのは自然の摂理でもある。そのためこのヴァレンタインの日は、中世以来愛の占いの日となっている。この日の朝早く起きて噴泉フンテンのところ、教会の前ではじめて出会った人がたれであるかによって、婚約者、恋人がこの年できるかどうかを占う。あるいは最初に会った相手をその年一年間にかぎり「ヴァレンタインの人」として呼び合う習慣もある。花や、カード、ケーキなどを相手に送る習慣から、やがてチョコレートの贈答が現代では流行するようになった。

英国ではこの日は子供達にとっても楽しい日で、朝早く起き、「お早よう、ヴァレンタイン様！」と相手が答えない前に二度いえば、何かプレゼントがもらえることになる。これは嫉けのためである。子供の病気を治してくれたこの聖者は聖ニコラウスなどと同じように子供の嫉けの聖者として崇められる。家庭、幼稚園、学校などで、出会った先生や友達同志が「お早ようございます」、「ありがとうございます」、「今日は」、「さようなら」といった挨拶がしつかり出来るようにすること、父母や叔父叔母などに手紙を書いて挨拶をさせ、幼いながらも交際の仕方を嫉けることも各国で行われている。

ヴァレンタインという聖者は、盲目の娘の目を治し、癩病や佝僂病の子供を奇跡によって救い、さまざまな守護聖者として崇拜されたが、ついには男女の愛、結婚を司る聖者となり、仲人、媒酌人の聖者として崇められるに至ったのである。中世以来、民衆の宗教的情熱は、その高まるどころ、ヴァレンタインの聖者像を創り上げるとともに、庶民のささやかで切実な愛を守護してくれるよう聖者に願って、受け入れられたのである。

宗教にみる苦難の問題

苦難は理論的に理解される問題ではなく、この人生に生を享けた人間が現実には背負い、受けている実存の問題として出発する。仏教でも「生、老、病、死」の四つの苦しみをあげている。生まれてこの世に在ることが苦の始まりである。特別に他の人たちと異なる苦しみを受けるだけでなく、生そのものが苦しみでもある。

大蔵経の中に「箭喻経」という短かいが仲々意味深い經典がある。もし毒箭に射られた人がいて、苦しむのを見たらば、駆けよって毒箭を抜き取り、毒を傷口から出し、薬や包帯で手当をする。もし何の目的で毒箭を射たのか、その毒は何であるか、誰がやったのか、これらのことが分るまで、手当をしないとすれば、射られた人は死んでしまうかもしれない。宗教は何であるかを知ることではなく、どのように生きるかという点に主眼がある。この四苦だけではなく、さらに「愛別離苦」、「怨憎会苦」、「求不得苦」、「五蘊盛苦」、を加えて八苦ともいつている。

キリスト教においても同じで、原始キリスト教のイエスの活動は、ガリラヤ地方から福音伝道がはじまるが、それはまず病める人々、足萎え、盲目の人、癩患者、悪霊に憑れた人、聾啞者、血漏をわずらう者などである。そのほかにキリストが心を向けたのは、貧しい者、いと小さき者、弱き者、孤児、やもめ、異邦人などである。「健やかな者は医者を要せず」といい、イエスが集めたのは迷える羊の喻え話のごとく、迷える仔羊、悩む者、飢え苦しむ者であった。キリスト教の出発点は、神学や教義よりもこのような人間の苦難にいかに向面し、これを治癒し、あるいは安らぎと慰めを得させるかということであった。釈迦も弟子たちに修行の上で、時間の有限、無限の問題、宇宙の有限、無限、肉体と靈魂は同一のものか、別個のものか、悟りをひらいた人間に死後はあるのかないのかといったようなことをはてしもない議論することを厳しく禁じた。

キリスト自身苦難にある人々、迷い悩む人々へ愛をそそぐだけでなく、最後には自ら人間の原罪を引き受けて、十字架上で償いの死を遂げるに至る。これを「受難」(Passion)の行為と呼んでいる。このような行為は無償の愛、神に等しいものであり、神人一体、あるいは神の子となえられるに至る。のちの神学、宗教的思惟においては、苦難を貫く「放念」とか、霊の働きと呼ぶ魂の深部から発し、全存在を聖化してゆく行為となる。ヨブ記のような苦難の宗教文学的テーマをかって詳しく取りあげたことがあるので、再び触れないが、ここでは特に日本においてハンセン氏病の人々がいかに苦しみを受け、それを宗教的なものに深めていったか、この病氣と闘い、病者たちに人間らしい生き方をするために、医学にたずさわる人々がどのように挺進し、献身的に奉仕したかについてその一部をここで考えてみることにする。

玉木愛子の句境

玉木愛子の句集「眞夜の祈り」(新地書房)はほぼ全生涯にわたっている。玉木愛子は大坂船場材木問屋に生れ、いとほんとして両親の愛情につつまれて育った。しかし幼い頃彼女をおぶったり抱いたりした使用人から癩が感染したらしい。使用人ははじめは隠していたが、五、六年経つていとまももらつて旅に出たという。玉木愛子の発病は女学生の頃であつた。女学校を休み、家の奥まった部屋に身を隠した。ある節分の夕方、妹にさそわれて、夕闇にまぎれて神社に詣でた。節分の豆(年豆)を受けとつたが、それを思い切り空一杯に投げた。

年豆を夜空に投げて泣く娘かな

「お星様、私は貴方のところへ行きたいのです。一日も早くこの命をお引きとりください。……」こう呟いて、涙を流したという。(自伝、年豆)。癪にかかつて死を願ひ、一度は自殺を考えない患者はないといわれるほど、絶望的な病氣である。この句はむろん女学生時代に詠んだのではなく、あとになって當時を追想して成ったものである。その後さまざまに悩み、苦しんだのちに、ハンナ・リデル女史の設立した熊本癪者のための回春病院のあることを知り、手紙を出したのをきっかけに、入院が叶えられた。彼女は家族に別れを告げ、家を出て、熊本に向つた。ハンナ・リデルの愛と奉仕の中で愛子はキリスト教に入信し、同じ病いに苦しむ人々と生活をともにし、俳句を作るようになる。

蜂うなる春らんまんの眞晝かな

宇宙一杯に満ち満ちている春の眞晝の光と生命をうなりをあげてとんでいる蜂の翅音にとらえている。もし「花らんまん」とでもすれば、通俗に墮する。信仰の中に安らぎを得、神の恵みの中に生きる道を感じている中での一句である。

拜堂を出ればうつし世花吹雪

癪者たちの折りは深く長い。日曜日の礼拝を終えて、御堂を出ると、折しも花吹雪がしている。折りによって神と交わっている世界から、現世に戻ってみれば、折しも美しい花吹雪であったという感慨である。

逢へば泣く母とならびて朝寝かな

家族との断絶をはかった身を案じて、久しぶりに回春病院に面会に来てくれた母親とくつろいで朝寝をする。しかしわたしの不注意のためにとたえず己をせめては泣く母親である。玉木愛子の癪は神経癪であった。やがて手足がしびれて萎え、足を切断しなければならなくなる。

足断ちしわれやでで虫ふとおかし

毛虫はへり蝶と化る日を夢見つつ

足を切断し這って動かなければならなかったわが姿をまるで蝸牛のようだと自嘲している。しかし暗くみじめなものになっていない。自己を醜い毛虫にたとえ、美しい蝶と化って舞う日を待望する。此岸から彼岸への飛翔の生を夢見ていた。彼女の中に信仰が柱となっている。回春病院から長島の愛生園に移ってからは、一層句作に情熱を傾けている。

句にゆだね神にゆだねて去年今年

埋火よ世に隠れたる汝とわれ

信仰と句作に生きること、これが玉木愛子の道であった。火鉢の灰の中に世に隠れてひっそり温もりを与えている埋火に己が姿を感じることもあった。

さぐり匍ふ手をつく縁もしかと秋

音のみの世もまたたのし小鳥来る

足を切断したあと、やがて癪が眼を犯すようになり、右眼左眼を摘出し、完全に盲目の身となった。匍つて手さぐりで縁側に出てあたたかい澄んだ秋を感じとった句である。聴覚のみに生きる世界となるが、秋訪れる小鳥たちの気配に作者は「たのし」と肯定的な生きる喜びを見出している。病友に乳母車に乗せてもらい、礼拝堂にいった。

われうらら花も霞も見えねども

明け易し眞夜の祈りと思ひしに

前句は礼拝堂の祈りを終えて、自室に帰るときの作であろう。全盲の身であり、桜も霞も見えないけれど、一杯にうららかな春を受け入れ、浸っているという感慨である。後句は眞夜まで祈りつづけていたが、夏の短夜は明け易く、知らぬまに白々と夜明けを迎えていたのである。玉木愛子は最初の句集にはこの句をとって、「眞夜の祈り」

と題して上梓している。

目をささげ手足をささげ誕生祭

足と手だけでなく、手も麻痺し萎えていた。手足をささげ、目をささげ、もはやこれ以上ささげるものない極限の中でクリスマスを迎え、キリストの誕生を祝う感慨である。

萎えし手をかさねいただく草の餅

わが裏に別のわれあり濃あぢさゐ

愛生園の寮内でたれかが雛節句というので蓬を摘んでつくった草餅をどうぞと贈られた。作者は萎えた手をかさねて、厚意を謝し、いただくのである。盲目の身に見えるのではないが、わがうちに別のわれがいて紺の色冴えたあぢさゐを思い浮べ、これを見ている。滅びゆくものと、滅びざるものをはっきり突きとめている。

死の影に癪の一喝初笑

昭和二十七年元旦の作である。死の影がふとよぎる想いがするが、まだこの業病の苦しみは終わっていないと一喝

し、ひとり笑い初めをしたという。いかにも気の強さを感じさせるが、この作者はこのような心のゆとりを持つている。自己を客観視し、俳句に遊び、俳句の世界を完成することができたのである。

信ずれば天地あめつちのものあたたかし

限りなき命を信じ露の空

盲なる月日あかるく菊に住む

作者の到り得た境地は、不思議と健康な人々の世界より明るく、あたたかく、無限の生命の流れの中にあるようである。玉木愛子の生活は、聖書を病友たちと読むこと、俳句を作ること、祈りをさげること、ときどき訪れる小鳥や虫、枯れた落葉を吹く風、雲間を洩れる日差しを友とし、これを全存在で受けとめる生活であった。昭和四四（一九六九）年、八一才で長島愛生園で天に召された。

津田治子の歌の世界

玉木愛子とともにあげなければならないのは、津田治子の短歌である。津田は明治四十五年佐賀県呼子町に生れた。母は早世し、十四才頃から病気の徴候が現われ、十八才頃癩病の診断をうけた。父親のはからいで、谷間の小屋にひとり隠れて暮したが、当時熊本にある癩患者の施設の回春病院に入院し、本名を捨て、津田治子と改名した。

回春病院は英国の篤志家、求癪事業のために来日したミス・ハンナ・リデルの創建に成るものである。治子が入院したとき、リデルは昇天し、姪のエダ・ライトが教母となり洗礼を受けた。彼女は小学校しか出ていないが、キリスト教の教えを素直に受け入れた。玉木愛子と同じように、心の安定を得るとともに、病友にさそわれ、短歌をはじめようになった。

ありありとこの身崩るると知りしとき信篤き人に導かれたり

美しき死を癪院に遂げよとぞきびしくやさし今日の長老

これらの歌はミス・ライトや回春病院の司祭たちによって心のよりどころと安らぎを得た喜びを詠んでいる。むろん晩年当時を回想しての喜びと感謝の作である。

死ねざりし夜をさかひに一生病むむごくきびしいのちと思ふ

癪に羅った者はかならず自殺を思う。彼女も何度も企てたが、果さず、生涯病氣と闘うことを決意する。「美しき死を遂げよ」というライト女史の慰めがそう決意させたのであろう。のちにはつぎのような己が生にたいする受けとめ方もしている。

癪に崩れてすぐる生涯はありありと吾がために主がそなえ給ひし

いとけなく神を信じて苦しみの多き一生を遂げしめ給へ

「いとけなく神を信じ」てとは、何の懷疑もなく、素直に信仰にはいつてという意味である。神への敬虔さを失わず、信仰を貫いたヨブは、最後には昔のような幸福が与えられ、健康になり、子供を多く持ち、財産ゆたかに、暮したと「ヨブ記」は語っている。昔からいわれているように、ヨブがそのままであることは余りに悲惨であり、救いがない。そのためにこの結末はあとでつけ加えたのであらうといわれている。このような前提の上で、治子は自分にはヨブの終りの幸せは必要ではない。この与えられた苦難を神の試練と思ひ、耐えてゆく苦難の生涯を生き抜く決意の歌である。治子の人柄にもよるが、ライトの導きにより自己の歩むべき道を見出したともいえる。三十歳にしてつぎのように詠んでいる。

現身にヨブの終りの倅しあはせはあらずともよししぬびてゆかな

ヨブは神からさまざまな試練を受けるが、ついには癪に侵されたヨブに幸福が与えられる。しかし私にはそれは必要ない。この苦難に耐えて生きてゆくだけであると己が信仰を吐露している。これはこの作者の代表作であり、津田治子の伝記小説を書いた大原富枝はその題名を、「忍びてゆかな」としている。

病むために苦しむために来し世とも肯ひて身に残る倖

自己がこの世に生をうけたのは、この業病の苦しみをうけるためであつたのかと、肯定してこれをわが使命、責任とも思うようになる。

型なく身は崩れつつ生きゆけば老父を思ひキリストを思ふ

社会から隔絶した病院にいて、キリストへの信仰に生きる生活にいたが、しかし老いた父のことを思うのは、人間の自然な情である。しかし家族からはだれ一人として見舞う者もなく、便りも全くなかった。若くして死んだ母を恋う歌もあり、妹や弟を案ずる歌もあった。しかし一家の人々を不幸にしないためにも、自己の名を消し、すべてから断絶しなければならなかった。

病む吾を見捨てしは血につながる者この世のことはむごく切なし

うかららのひとりも訪ね来ることなし死ぬるを待たれぬてながきかな

「アララギ」に入会し、菊池恵楓園に移つてのちも短歌に専念した。「私がこの世に置かれた立場から、悲哀と痛恨を表現し、何かに訴へずにはおれなくて、その方法として短歌が一番肌に合つてゐる……」、「自分の生活を浄

化して、いつも宗教的に安定させてゆき、その安心立命の境地から、美しきものを讃美し、それを作品に表現してゆきたい。自分の肉体の苦しみも、生活から来る苦悩も踏みしめ、踏み越えて、表現するときは、ただちに淨らかに打出してゆきたい」と治子は述べている。純粹に宗教だけに生きるのではなく、肉身を持つ生身の苦悩や悲哀も歌によって淨化し、克服しようとした。療養所内での友情、恋愛もあり、さまざまな相剋もあった。

在り堪へてゆかむ思ひも限りありて雨ふりいでし夜半に眠らむ

今生に止む歎きとも思はねど月のきよきに歩む野の上

これらは煩悶、苦闘の過程に生れた作品である。昭和二十九年頃、癩菌に目を犯されて視力が衰えていった、昭和三十八年腹膜炎となり、病室に臥す身となった。夜明け、牧師を呼んでくれるように看護の人に頼み、「天国に行く準備をしましょうね」という牧師の声に、「ハイ」と答え、衰弱しきった病身のどこにひそんでいたかと思う程、声高く讚美歌を歌ったという。その後死の床にありながら、一ヶ月近くの間歌を詠みつづけた。

ひとつぶの葡萄が喉をうるほして生ける思ひあり夜半のかわきに

あつき湯ものどにとほらずなりてより十日余りはたつにやあらむ

命終のまぼろしに主よ顯^たち給へ病みし一生をよろこばむため

死に臨んだときのまぼろしに、主よ、わたしの前に立っていただけたら、この病いと闘ったわが生涯のせめても
の喜びとしたいという意味である。この歌はさきに挙げた「忍びてゆかな」の歌とともに津田治子の生涯をかけた
重味のある歌である。

苦しみのきはまるときにしあはせのきはまるしもかたじけなけれ

守護天使わが目に見ゆと思はれてあつき苦しみのなかに安けし

苦しみのきはみにありてよき友のなかに護らるる倅^{さき}を思へり

多くの病友に看護をうけながら癌性腹膜炎の苦しみの中で、人々に感謝し、生涯を肯定し、生きることの喜びを
明るく高らかに歌いつづけて永久の眠りについた。享年五十二歳であった。

救癩事業に挺進した人々

日本における救癩事業はまず御殿場に建てられたテストウィード神父による神山復生病院やさきにふれた熊本の
ミス・ハンナ・リデル女史による回春病院の設立から始まるといってよい。さきに述べた玉木愛子や津田治子のよ

うな俳人、歌人が病いとの闘いの中で詠みつづけたのも、病院施設の中にあつて生れたともいえる。やがて村山の全生園、岡山の長島愛生園、星塚敬愛園などが生れ、癩患者はかつてのように乞食となって物乞いしたり、諸国の巡礼地を放浪せずに生活するようになる。この救癩事業に挺進した人々は、多くは宗教的信念を持った医師たちが多かった。その主な人々をあげれば、光田健輔、林文夫といった人々をはじめ、女性の医師、看護婦がかなり多く加わっている。これらの人々は、不治の病いに苦しむ人々のために、献身的に奉仕したのである。

救癩の女医

救癩事業に奉仕すべく長島の愛生園に赴いた小川正子は、尊敬する愛生園長の光田健輔の命により、中国、四国各地に隠れて悩み、苦しんでいる癩患者を探して癩は遺伝でなく、伝染病であることを啓蒙し、同じ病いに悩む人々のいる救癩の施設にはいるよう説得することを仕事として、班をつくって僻地僻村をめぐり歩くこととなった。小川正子は昭和四年東京女子医学専門学校（東京女子医大）を卒業後、各地の病院に勤務していたが、念願叶い昭和七年長島愛生園に赴任した。その後光田園長から高知県や瀬戸内海の各地へ患者の検診旅行とともに、癩が遺伝ではなく、伝染病であることを啓蒙し、愛生園にはいることをすすめる仕事にたずさわる。「小島の春」の後記に「検診行の記録は全部くわしく書いて置きなさい。時がたつとその時の気分がうすらいで千遍一律の物になってしまうから、その度々直ぐに書き残しておくんですな」、と園長からいわれた。「出張してその報告書を提出するのは官吏としての義務ですよ」ともつけそえたという。小川正子は忠実に記録した。その記録の中に、時々詠んだ自己の短歌をつけ加えた。やがて「小島の春」と題する救癩文学ともいふべき一巻が昭和十三年長崎書店から世に出ることになった。当時は日中戦争たけなわの時であったが、大きな反響を呼び、昭和十五年映画化されるに至った。

「土佐の秋」の中に伊予境に近い山奥の村の患者が家族と別れてゆく悲しみを詠んだつぎのような歌がある。

トラックのふちにつかまりすすり上げすすり上げ泣く四十の男

夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世に無からしめ

この最後の歌は救癪にたずさわるひとびとの悲願でもあった。この悲願は宗教的な愛と信仰によって支えられて来たものである。

額づきて土地の平和を旅の子が祈りし事は人知らざらむ

作者は癪患者を検診したり収容するたびに、その土地が病いなき村となるようにひそかに祈った。瀬戸内海には沢山の島があるが、農家の人が畑を耕したり、桃を栽培している無人島がある。その一つの白砂島に女性の患者が一人隠れて棲んでいるというのをきき、訪ねたときの歌がつぎの作品である。

桃の花散りこめる土間に踏み入りて我は病友^{とも}を驚るかしつる

おもへ人はなれ小島の山蔭に癪女がひとりする雛祭りを

おもひがけぬ訪問に、孤独の生活に慣れた若い女性の患者を驚かせたようで、腫れて赤くなった手をあわてて後に隠した。しかし顔にはひどい麻痺が見えていた。しかし桃の節句の季節、お雛様をかざり、菱飾や花を飾ってあった。癪に苦しみ、肉親からも見離されても、やはり女性らしく雛を祭る心根に正子は深い感動を覚えたのである。病院行きをすすめると、病院にはお金がなくてゆけぬという。お金も何もいらない。病院へはいり、許されるだけの治療と同じ境遇の人々と心を通い合せる生活のことなどを語った。「こんなにこんなに優しく云ってくれる人、今迄になかったんじゃ」とすすりあげて泣いた。

白砂の浜の白砂いつの日か病友を迎ふる船をつくべき

再び船上の人となったとき、白砂島の癪女のいる屋根が見えた。「あそこで一人の女の人が十数年を独りで泣いて来た、こうして置いたらいつまでも命の限り泣いていくであろうあの女の人の事、もう一度私はあその桃畑に行かねばならない。もしもあの人がどうしても病院は行かれないとしたら、私はあの人の友達になりたい。」と正子は結んでいる。その後も検診の旅をつづけるが、ついに昭和十五年過労のために肺結核となり、愛生園から故郷山梨県春日居村に帰り療養をつづけた。しかし昭和十八年「小島の春」の一卷をのこして永眠した。享年四十一歳である。

小川正子とともにほぼ同じ年代で、救癪のために献身した女医に林富美子を逸してはならない。小川正子は第二次大戦末期結核のために若くして世を去っている。みじかい生命を華やかに燃えるように燃焼させていった。これに比べ地味で控え目な林富美子は生涯八十年をこの救癪のために奉仕して現在に至っている。光田健輔のすすめで

救癲の医師林文夫の許に嫁し、夫妻揃って各地の療養所に赴任している。小川正子と同じように、東京女子医大の出身である。林文夫の家も富美子の家もキリスト教の信仰の強い絆で結ばれた聖家族のような家系である。武蔵野の一角にある癲療養所、全生病院に勤務したとき、ハンセン氏病の患者たちの強い信仰の姿に心打たれ、「野に咲くヴェロニカ」でつぎのようにしている。「私自身も、この極限の世界で生き続けている病友達の中で、働かせてもらったことは、むしろキリストを身近に感じさせてもらったということである。癲者と共に歩み給うキリストは、また私と共にいてくださったのである。五十年に余る病友との交わり、癲院に私をとどめさせたものは、病友の純粹な信仰と、あの贖主キリストに対する、ひたむきな愛情にひかれたからだと言えるのである」(四六、四七頁)。長島の愛生園に転任してからは、小川正子と同じように四国の山奥、四万十川を遡って癲に悩む人々の住む村々を訪ね、愛生園に入院させる検診の旅を行っている。

しかしさらにまだ救癲事業にとって未開拓な沖縄の島々に単身赴いている。沖縄の病友たちは本土よりも悲惨で、何の収容施設もないどころか、社会から嫌われ、町や村に住むことも許されず、逃れて人里はなれた洞窟などを蝙蝠のように棲み家としていた。島の山かげに隠れている病者たちをあちこち訪ねて検診をつづけた。林富美子は名護で過した夜つぎのように歌っている。

いねられぬ夜のわびしさの耐えがてに主よ兄弟よと闇に呼びてみる

ここに熊本の回春病院にいて、自らも癲患者であるが、沖縄の救癲のために何とか施設を造ろうと活動している青木恵がいた。彼は牧師となって各地をまわっていた。残波岬のところで、青木が癲病にかかっている一人の島の

女性を連れてきた。別れる時、「今あなたは私に何をして欲しいですか」と林が訪ねると、讚美歌の「雪よりも白く」を歌ってくれといった。それを皆で一しよに歌った。持参の大風子丸薬を与えると、お礼をいい、別れていった。ただ讚美歌だけがこの病友の強い支えであった。

その後大隅半島の星塚敬愛園に転任し、さらに瀬戸内海の大島青松園に移り、そこで敗戦を迎えた。ここでの三年五ヶ月の奉仕の中で、劇務の中で文夫の結核は進行し、ついに二児を残して帰らぬ人となった。救癪に深い御心を寄せておられた貞明皇后の御歌への返歌の一つにつきのような文夫の歌がある。

大御母に励まされつつ遠つ園をさほひ巡りしは只夢とこそ

外国の病院施設をしらべたり、遠いあちこちの救癪病院に勤務し、患者たちの面倒をみてきた生涯を回想しての感慨の一首である。園内の相知る人々、病友たちの慟哭の中をとくに親しい人々の肩にかつがれて、その柩は坂へのぼっていった。

み柩はわけて親しき病友にかつがれましぬ夏萩の道

御殿場の復生病院はさきに述べたごとくテストウィード神父により設立され、以来フランス、ベルギー系の神父が病院長をしていたが、昭和五年岩下荘一神父が日本最初の病院長となった。林富美子がのちにカトリックに改宗したのは岩下神父から少なからず影響を受けたためである。岩下神父がどのようにに救癪事業につくしたかは、「闇

を照らす足音、岩下荘一と復生病院物語」(重兼芳子)に詳しい。これは現在もこの病院で療養をつづけている患者の聞き書きをもとにしたものである。岩下神父自身が自著の序文につきのような告白をしている。ある夜結節癩で喉頭がふさがり、苦しみあえぐ癩女のベッドのかたわらで、為すすべもなく見守っていた岩下は、いく度も自分の部屋と病室を往復した。「哲学することが何の役に立とうといつて書棚にならべてあるプラトン、アリストテレス、カントもヘーゲルもみな、ストーブの中に叩きこんで焼いてしまいたかった。考えてみるがいい、原罪なくして、肉体の復活なくして、この現実が解決できるか。すべてのイズムは顕微鏡裡の一癩菌の前にことごとく瓦解するのである。私は初めて赤くきれいに染色された癩菌を鏡底に発見した時、その無限小のうちに、一切の人間のプライドを打破してあまりあるものがひそんでいるのをみた。私はこの一癩菌の故に、心からひざまずいて『罪のゆるし、肉体の復活、終わらなき生命を信じ奉る』と唱えうることを神に感謝し奉る。……然し今や予は、この呻吟こそ最も深き哲学を要求するところの叫びたるを識るに至ったのである。」このような内面の葛藤を語るものは日本の宗教思想、哲学においてはじめてである。

昭和二十六年御殿場市の復生病院に林富美子は二児をともなつて移り、ここで医師として勤務することになった。神山復生病院はカトリックの病院であるが、国立の療養所とちがい国庫補助はなかった。

ここでは国内外からの援助の絶えた敗戦後の状態では、元氣な患者は自ら働くよりほかはなく、畑仕事はむろんのこと、製茶、炭薪づくりまですべて自分達の手でおこなった。馬、乳牛、豚、鶏の飼育、その飼料を箱根山の草刈場まで病友たちが馬車を仕立て刈り取った。女性の患者も洗濯、布団作り、裁縫、包帯まきなどの治療室の手伝いをした。男女病室それぞれに元氣な患者、働ける者、手伝える者はいた。それは修道院の修道士、修道女のような生活であった。働けぬ重症者は聖堂に来てロザリオをつまぐり、働く病友の無事を祈る。ヌルシアの聖ベネディ

クトの「祈り且つ働け」の言葉をそのままここでは実践していた。ある日、若い患者たちが雑木の伐採に出かけたあと、目盲いの患者がしきりに祈っていた。つぎはそのときの一首である。

さざめのみみだう
細雪聖堂の窓に降る午後を盲目の人は祈りていたり

昭和四十六年、林富美子は同じ御殿場市にある特別養護老人ホーム「十字の園」に奉仕することになった。身寄りのないひとり生活できぬ病弱な老人を看取るところである。そこには癩患者とはちがった人生の終着駅に立つ老人たちの看護診療はけっして並大抵の苦勞でないのであるが、富美子は自分自身老境にはいつてのちも、なお医療のため、社会のために献身を惜まなかったのである。この「十字の園」の老人と直面しての愛のあり方は、看護婦の土田せいひの画と自身の自由詩の合作による「夕暮になっても光はある」（聖山社）と題する詩画集は、老人問題にたいして宗教が示し得る道をもの語っている。その詩の一つをここにあげる。

もの言わぬ老人の忍従の日々は、

人生の奥の細道を歩きぬこうとしている、

それは生涯の中で

最も重みのかかった時間に違いありません、

そのあとに続く

安息と栄光を勝ちとるために、

たとえ植物とよばれても

なお気高さをみるのは、

永遠に近づいているためでしょうか。

「花一輪あれば、老人に慰めを与え、安らぎを与えることができる」と林富美子は語ったことがある。それはやさしさ、いたわり、愛のことであろう。救癪事業に生涯を捧げ自らも晩年を歩むこの宗教的心情の持主は、「野に咲くヴェロニカ」(小綬鶏社)という自伝に近いものを書いている。その中に救癪の施設である駿河国立病院の復活祭に赴いたとき数名の盲目の癪女がひとかたまりになって坐っていた。「そのあたりから一きわ美しい、祈りと讃美の声が聞こえてくるのに気づいたのである。白いベールに覆われた癪女達の顔はさだかではなかったが、私はひどく心をうたれて絶え間なく涙が伝わり落ちてくるのをどうすることもできなかった。ここにもペロニカはいたのである。イエス・キリストの御傷の痛みは、彼女達の祈りと讃美でどんなに和らげられたことであろうか。」と述べ、次の一首が添えてある。

空色のペロニカの花咲きこぼる復活祭のミサの途かも

聖ペロニカは十字架を背負ってゴルゴダへ歩むイエスの額から流れる汗をぬぐったという聖女のことである。ヨーロッパでペロニカの花といえば、復活祭の頃咲く「おおいぬふぐり」のことである。淡青の路傍の野の花であるが、春早くさがけて咲くので、春を告げるものの一つである。キリストを見てペロニカの流した涙の花である。

以上苦難にたいし、宗教的に生きた人々、救癩事業に挺進奉仕した人々についてふれてみた。むろんこの他に多くの人々のことにも触れねばならぬが、ここでは比較的詩歌をもって自己の真情を表白している方々のみを取り上げ、宗教の内面的な歩みをたどってみた。問題はこれでつきるものではなく、更に改めて多くの角度、分野からも考察してみたいと思っている。

(平成三年九月三十日、未完)